

「やがては五十萬噸の大海軍をつくるんだ」と稱してゐるが、日本には關係がなひ。かれ等の戦闘力は、戦艦が「マラー」以下二萬三千噸級のものが四隻、巡洋艦も四隻、驅逐艦三十隻、潜水艦も十七隻あつて、三流海軍と二流海軍の間ぐらゐのところにある。戦艦「マラー」の煙突をわが「陸奥」の眞似をして曲げて見たり、潜水艦戦に力を入れたりしてゐるが、とても極東まで遠征する戦力はない。

十年もたてばいざ知らず、ロシア海軍はまだ太平洋に乗り出すことは絶望だ。イタリヤの造船所で三千噸級の潜水艦を造り、それをウラヂボストックへ持つて來るといふ噂があるが、わが海軍は、冷笑してゐる。

そんなことをしたら、いよゝ日本の感情を悪くするばかりだ。——赤色海軍が太平洋作戦などとは、片腹痛い。

經濟五箇年計畫の正體

たゞ油断ならぬのは、今後のロシアだ。五年前のロシアの強さと、今のロシアの強さとは、段ちがひである。五年後には、恐らくもつと強くなるであらう。

ロシアは、政府が何でも思ひ切つたことを、ずば／＼やる獨裁政治の國である。軍備の擴張だつて、軍事委員會の決議さへあつたら、誰憚らずに出来るのだ。ロシア（蘇聯邦）の強味は、この點にあるのではないか。

ロシアは今、約八百億圓の金をかけた經濟五箇年計畫が、終つたところである。

スターリンは、あの髭の濃い眼の大きい、いかにも獨裁官らしい顔に、「世界よ、われ等の腕を見よ」といはんばかりの、勝ちほこつた色をうかべて、大演説をやつた。そして、彼はかう叫んだ。

「光榮ある五箇年經濟計畫は終つた。こゝで我輩が特に言ひたいのは、これでわがソビエト（蘇）聯邦の國防の缺陷がなくなつたことである。靴や、綿や、紡績や、そんなものの工業はまだこれからだが、鐵、石油、機械、自動車、飛行機などの軍需工業は、どんな國にも負けぬやうになつた。靴がないとか、卵が食へぬとか、色々不平に思ふ者があるかも知れぬが、國防のためには、もうしばらく辛棒してもらはねばならぬ」と。

全く今のロシア人は、軍備のために食ふや食はずの目に遭つてゐる。

日本でも「陸軍や海軍が、八億圓も金を食ふのは怪しからぬ。」などと、變なことをいふ人物があるが、そんな人に限つて、外國かぶれの根性曲りが多いのだ。

わが國には貧乏な、苦しい生活をしてゐる人が少なくない。しかし、それは軍備の罪ではないのだ。貧乏の原因は、もつと他にある。そんなことは、少しでも世界經濟のほんたうの姿を見た者には、すぐわかるはずだ。

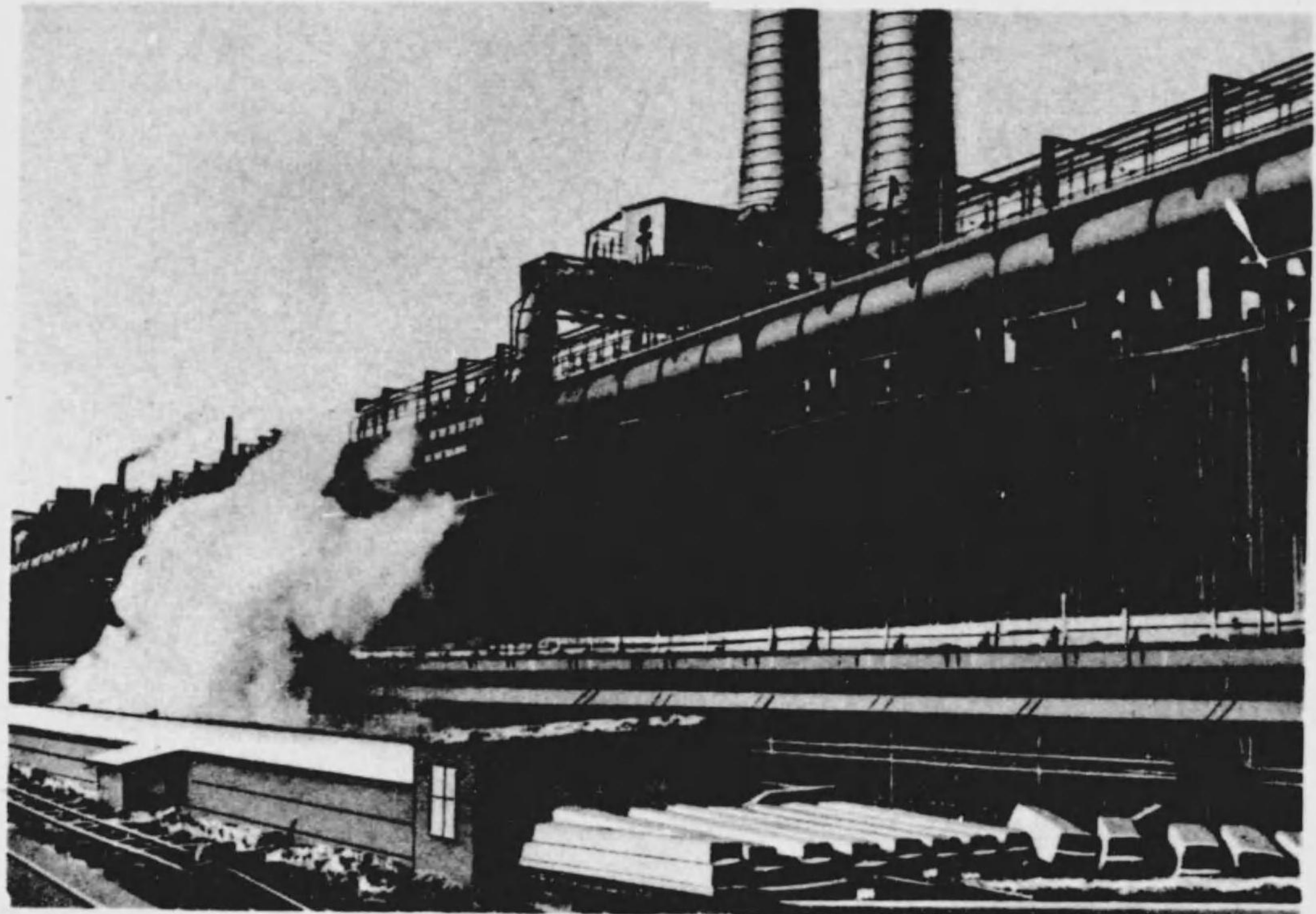
しかし、ロシアになると、國の經濟力から見て、軍備があまりに重すぎる。政府の關係以外のロシア人は、白パンなんか、ほとんど食ふことが出来ず、一片の黒パンを買ふためにさへ、何時間もパン屋の店先に立つてゐなければならぬほどである。

そして、勞働力のある者は、みな狩り出されて、鐵道を敷いたり、電氣工場に入つたり、自動車や飛行機を作つたり、ありとあらゆる軍事に關係した仕事をしてゐるのだ。百姓だつてトラクターを運轉して廣い農場を耕してゐるが、この連中がいざとなれば、装甲機械化兵團へ入隊して、戦車や装甲自動車を運轉するのだ。

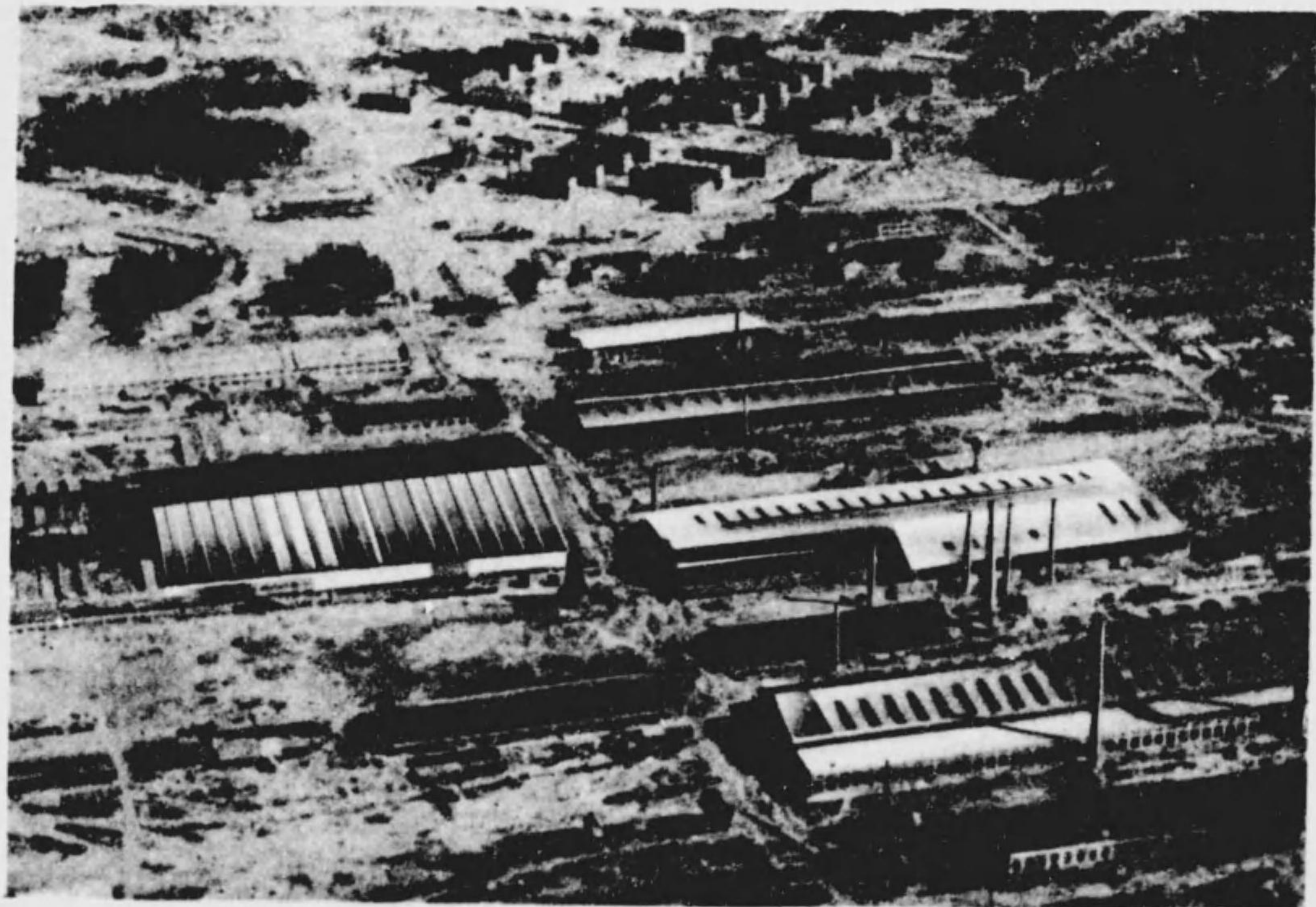
かうして、かれ等は自動車でも、飛行機でも、大砲、小銃、毒瓦斯、あらゆる武器や器材を、自分の國で造ることが出来るやうになつた。

經濟五箇年計畫の本体は、軍備五箇年計畫だつたのである。

もちろん、ロシアにも戦争が厭な連中が多いのだが、一寸でも政府に反對したら生命が危ない。恐



場工ス瓦のーコスモ。だ畫計年箇五備軍は畫計年箇五濟經



だのるなに地心の中業工需軍後今。帯地業工ルラウ

しいゲ・ベ・ウが、いたるところに監視の眼を光らしてゐるのだ。かれ等は、外國の憲兵のやうな生優しい憲兵ではない。容赦のない銃殺と投獄がかれ等の仕事だ。

モスコーである労働者が、何かむしやくしやした事があつたので、「スターリンの畜生奴！」と言、口をすべらしたばかりに、三箇月の懲役にひつばられたことがある。無智なユダヤ人の密輸入者が重大経済犯として檢舉されたり、前のニコラス廢帝の寫眞を持つてみただけで、「貴様は反政府黨だ」と責められて、足腰の立たぬやうな老人が、恐しいサロフカの流刑場へ、流されたりするのだ。ロシアは、やはり昔と變らず、恐怖政治の國である。

「こんな彈壓政治がいつまで、つゞくものか。」と、ある人々は思つてゐる。

しかし、スターリンは、「いや、やがてロシア人はみな、政府黨員になるんだから、その心配はいらないよ。」とつぶいてゐる。

そして、靴はすり切れ、へとく腹のへつた一億六千萬人を動員して、彼はふたゝび、第二の經濟五箇年計畫にとりかゝつたのだ。

第二回五箇年計畫はシベリヤが中心

第二回五箇年計畫は、一千二百億圓をかける大計畫だ。しかも、シベリヤ極東方面へ、重點を向けてゐる。

鐵道も新しい線を敷くし、大きな製鐵工場をつくるし、石油の井戸もどんく大がかりに掘るらしい。これが出来上つたら、シベリヤは一大産業地帯になるわけである。

又、西シベリヤ、ウラル山脈の麓、ウラル・クズネツクに、すばらしい工業地帯をこしらへようとしてゐる。

クズネツクの石炭と、ウラルの鐵をもつて、こゝに軍需工業の重點をおかうとするのだ。

スターリンは、「これで、ウラル、シベリヤが世界一流の工業地になるぞ。」と豪語してゐる。

そして、中央アジア方面からシベリヤへかけて、大發電所を續々と建てる計畫もある。

この軍需工業の重點が、モスコー方面からウラル地方へうつつて來ることは、極東作戦に、大變重大な關係がある。

赤軍はこれによつて、非常に遠征作戦の不利から逃れることが出来るだらう。

ウラル地方の工業化は、極東大進軍の前ふれである。かれ等の計畫は、ほとんど一から十まで戦争第一主義で、たてられてゐるのだ。

ボロシローフは軍事委員会で十人の軍司令官に向ひ、

「ジュネーブの軍縮會議で馬鹿者どもが演説に浮身をやつしてゐる間に、われ等赤軍は、戦争準備をしなければならぬ。」

と、訓示した。

羊の皮をかぶつた狼は、こゝで赤い舌を出して、その正體をあらはしたのである。

總動員の日本

極東民族の同盟

日本民族の精神力

われ等は以上で、太平洋と極東の兵形を一通り見渡すことが出来た。

そして、日本が戦略上から見て、眞に東洋の盟主であることがわかつたのである。

西太平洋は、もはやわれ等の海である。今後、米國海軍を目標にして、彼の七割以上の兵力をもつて固めたら、黒潮の國防線は絶對に崩されはせぬ。

百八十度から西の海洋と、赤道から北の海は、わが繩張の内にあつて、外國の大艦隊の挑戰的な行動を許さぬ形だ。

極端な言葉を使ふことが許してもらへるなら、西太平洋はわれ等の湖水であり、日本海はわれ等の池だ。日本が、三千年來、今のやうに強かつたことはないのである。今こそわれ等は海國日本の名を誇る事が出来るのだ。

ある外人は日本を「海神の寵兒」と言つた。
僕等は、この美しい大和島根に國を肇めたまうた大君の御威徳を今さらにあふぎ、血と汗をもつてこの偉大な海軍をこしらへた先輩の前に、心から頭を下げずにはゐられないのである。

大陸を見ても、明治維新の理想は、完全にとげ果されてゐる。

朝鮮、臺灣は、樺太、小笠原諸島とともに、わが國防の出城となり、今や先陣は、遠く興安省、蒙古の荒原へまで進んでゐるのだ。

まさに千里の陣營が、雲につらなつて、延びてゐるのである。

今、西郷隆盛を城山の草の下からよび起して、大興安嶺に立たせたらどうであらうか。いや、恐らくは、あの不幸な大英雄の魂は、すでに天かける神となつて、蒙古の大平野を見下してゐるであらう。

小磯國昭中将は、いみじくも滿洲を「靖國神社の奥殿」とよんだ。

さうだ。わが國防の第一線は、忠勇な軍隊の、血と骨とで、築かれたものである。

外國人の多くは、日本が飛行機と大砲と銃剣だけをもつて、この國防線を守つてゐると思つてゐるらしい。大變な間違ひである。

われ等の國防線には、大君に生命をさへげた祖先の魂がしみついてゐるのだ。

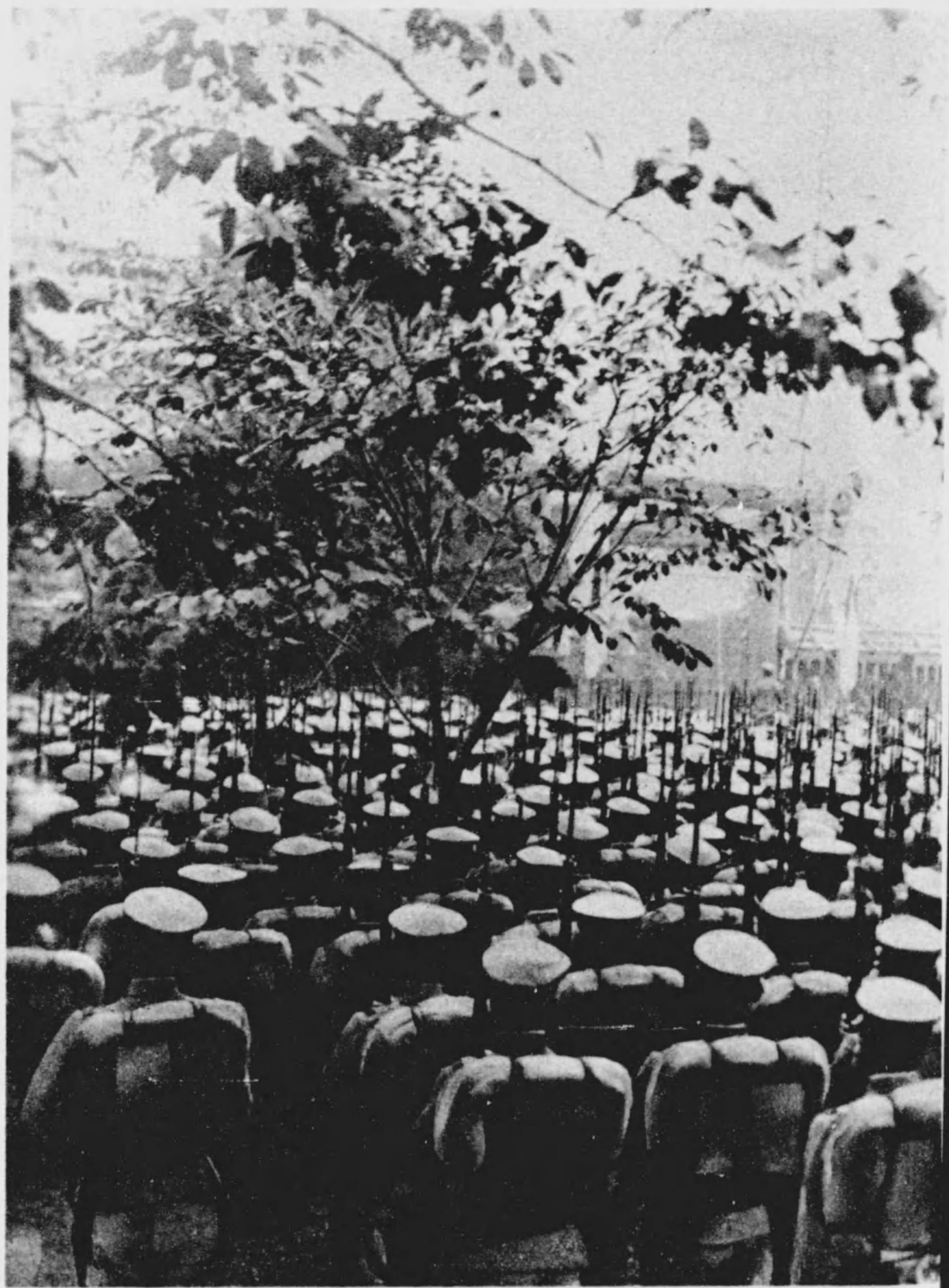
戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

戦死者の靈は永遠に戰場を守るのだ。——われ等は、明治天皇の御製を拜して、言ひしれぬ深い感激に打たれるのである。

滿洲を單に地理的、軍事的、經濟的に見ては間違ひだ。われ等は、自ら日本歴史の一頁を、身をもつて書いてゐるのだ、祖先の大理想を果さうとしてゐるのだと、信じなくてはならぬ。

この態度をもつて行けば、どんな敵にもかならず負けない。東郷提督の戦闘詳報の冒頭にあるやうに、「天祐」と「神助」が、かならず下るのだ。

神風は決して單純な自然的現象ではない。あの時は鎌倉から鎮西に至るまで、全日本が、「元寇來



すまりけがまあ、を空の蒙満、は神は神なるら



祭に社神國靖。る守を場戦は靈の先祖



れか強よ軍友。兵歩の軍國洲滿



れかなる忘を血の祖先。よ人古蒙

る。』の聲に奮ひたつたのだ。よほくの老人までが、刀を杖にして筑紫の濱邊へ駈けつけたのだ。その燃えるやうな戦闘精神が、蒙古軍を追ひ拂つたのである。あの戦争は、暴風雨がなくても、かならず最後にわが軍が勝つたに違ひない。

偉大な精神のない國民には、ほんたうの勝利は獲られない。

太平洋海戦も、極東戦争も、最後に來ると、精神力の戦である。機械的な兵器は、精神力によつて強くもなり、弱くもなるのだ。

赤軍でさへ、『日本軍の強味は、その歴史に根ざす精神力にある。』と、見てゐる。

これが弱くなれば、どんなに大兵力を備へ、いかに名將、名戦略家があらはれても、駄目である。魂の鍛練のない軍隊をもつて、どうして大戦がやれるものか。

滿洲國軍と極東民族

僕は、昭和五年に滿洲へ行つた時、つくづく『これでは赤軍と戦ふことは難かしいぞ。』と思つた。あの時の形勢では、わが軍は赤軍と戦ふのには、その前にまづ支那の東北軍と戦はねばならなかつたのだ。

どんなに弱くても三十萬の大兵を討伐するのには、一月や二月はかゝる。その間に、赤軍は大興安嶺を越え、チチハル平原に進出するだらう。

そんな状態になつた時の、わが軍の苦戦は、想像しただけでも、胸が悪くなるのだつた。しかし、今は違ふ。

今はわが軍が蒙古ダウリヤ方面で作戦をやると假定すると、後の兵站線やその附近を守るものは、わが鐵道守備隊だけでなく、滿洲國軍十萬の友軍があるのだ。わが軍は、後の心配をせずに、全力をもつて、前線の敵を搏つことが出来るのだ。これは戰略上、實に大きな強味である。

この愛すべき滿洲國軍の現状は、まだ生れたばかりであるが、張惠景大將の下に、奉天、洮遼、吉林、黒龍、興安の各警備軍が、熱心に訓練をつゞけてゐる。もう二年たち三年たてば、新興國の陸軍として、どこへ出しても恥づかしくないものになるであらう。

かれ等が、わが陸軍の眞剣な援をうけて、一日も早く立派な近代的軍隊になることを祈りたい。

僕は、ことに蒙古の騎兵隊の將來に望をかけるのだ。赤軍の騎兵がやつてゐるやうに、蒙古馬と西洋馬の雜種をつくり、その馬で思ふ存分荒野をかけまはつて、先祖以來の勇氣のほどを見せてもらひたいのである。

僕は極東の色々な民族が、日本を中心として、たがひに結びあつて行くのを見て愉快に耐へない。朝鮮や臺灣の諸君も、近ごろ母國を思ふ感情がいよゝゝ深くなつたやうだ。

僕のところへも諸君からよくお便をいたゞくが、みな「滿洲國の軍隊に入りたい」とか、「新しい潜水艦の設計をしたから見てくれ」とか、「支那の抗日が憎らしい」とか、日本を思ふ情があふれてゐるのだ。

中で臺灣新竹の青年黃天錫君から來た手紙は、ことに僕の胸を打つた。以下は原文の抜書である。「謹啓、聖世八年の初夏ははやくもおとづれて來ました。先生の御健安を御祝し申します。——小生の祖父は清朝時代、臺灣の地方長官を勤めました。——祖父はいつも祖國に盡せと申してゐたさうです。——先生。僕は日本の軍隊に入ることが出來ません。だから滿洲國の陸軍の歩卒になりたいのです。けれども御紹介下さる御方がありません。

先生。祖國たる滿洲國の兵卒になれるやう御紹介下さい。小生は死しても祖國の、護國の鬼となります。どうか兵卒になれるやうに御紹介下さい。極東を死守せんとする愛國青年の赤心よりお頼みます。——

滿洲國軍は、こんな青年を迎へて、いよゝゝ強くなるであらう。僕は極東の各民族から續々と、勇

敢な青年諸君があらはれて、極東防衛の陣に身を投じてくれることを望む。

極東が固まれば、更に西部南部のアジヤ民族、印度、アフガニスタン、トルキスタン、ベルシヤ、トルコ、暹羅の諸民族が、極東民族に劣らぬ武力を備へる日の来ることを祈りたい。

それにしても、支那が抗日戦をやめぬのは残念だ。君等をけしかけて来たロシア赤軍の士官達さへ、抗日戦争の恐しいことを論じてゐるではないか。

「日本は支那に向つて、三つの進撃路を持つてゐる。一つは満洲から北平天津を衝き、京漢線で中部支那を縦断し、漢口へ出る線だ。第二は青島から濟南へ出て、津浦線で南京を攻める線だ。第三は上海から揚子江を漢口に向ふ線だ。日本はこの三本の進入路によつて、完全に支那を征服出来る。これに反して支那は、日本に向つて全く進撃の路を塞がれてゐるのである。」

これが赤軍の見た日本と支那の戦略關係だ。

支那はこれで、「お前は駄目だぞ」と、焼印を押されたやうなものである。

支那よ。日本に向ける銃口を、なぜ西へ、そして南へ向けようとししないのか。僕は、かれ等の考の淺はかなことを、憐れまずにゐられないのである。

空襲の豫想

敵空軍の根據地

わが戦略態勢の強いことは、ほとんど天下無敵とも思へる。しかし、この強い兵形をもつてしても、空襲だけは、まぬかれることが出来ないのだ。

ことに戦争の初期が危険だ。空襲の目標にされるのは、主に東京を中心とする關東地方、大阪を中心とする阪神地方と北九州、名古屋方面だ。それに續いて日本海の舞鶴、新潟も狙はれる。北海道海岸の都市も危険である。

敵が空襲戦をやる目的は、第一にわが政治經濟の重點を破壊して國內を大混亂に陥らせ、第二に工業地帯を襲つて軍需工業を根こそぎにし、第三に焼夷弾や毒瓦斯弾をもつて、非戦闘員を攻撃し、國民を恐怖のどん底へ投げこまうとするのだ。

實に深刻な恐しい戦法であるが、クラゼウィッチ大將の系統をひいた兵術を、非常に熱心に研究し

てゐる米國海軍や赤軍は、かならずこの悪魔のやうな戦法を實行するに違ひない。

「武力は撃滅せよ。

國家は征服せよ。

敵の意思はたゞき潰せ。」

これがクラゼウィッチ戦法の根本精神である。この原則によつて、敵の空軍は、第一に東京を目標にするのだ。東京は日本の心臓だ。心臓を刺すことは、日本の生命を奪ふことである。

東京空襲は、敵の司令官にとつて、太平洋作戦上、もつとも重大な眼目だ。

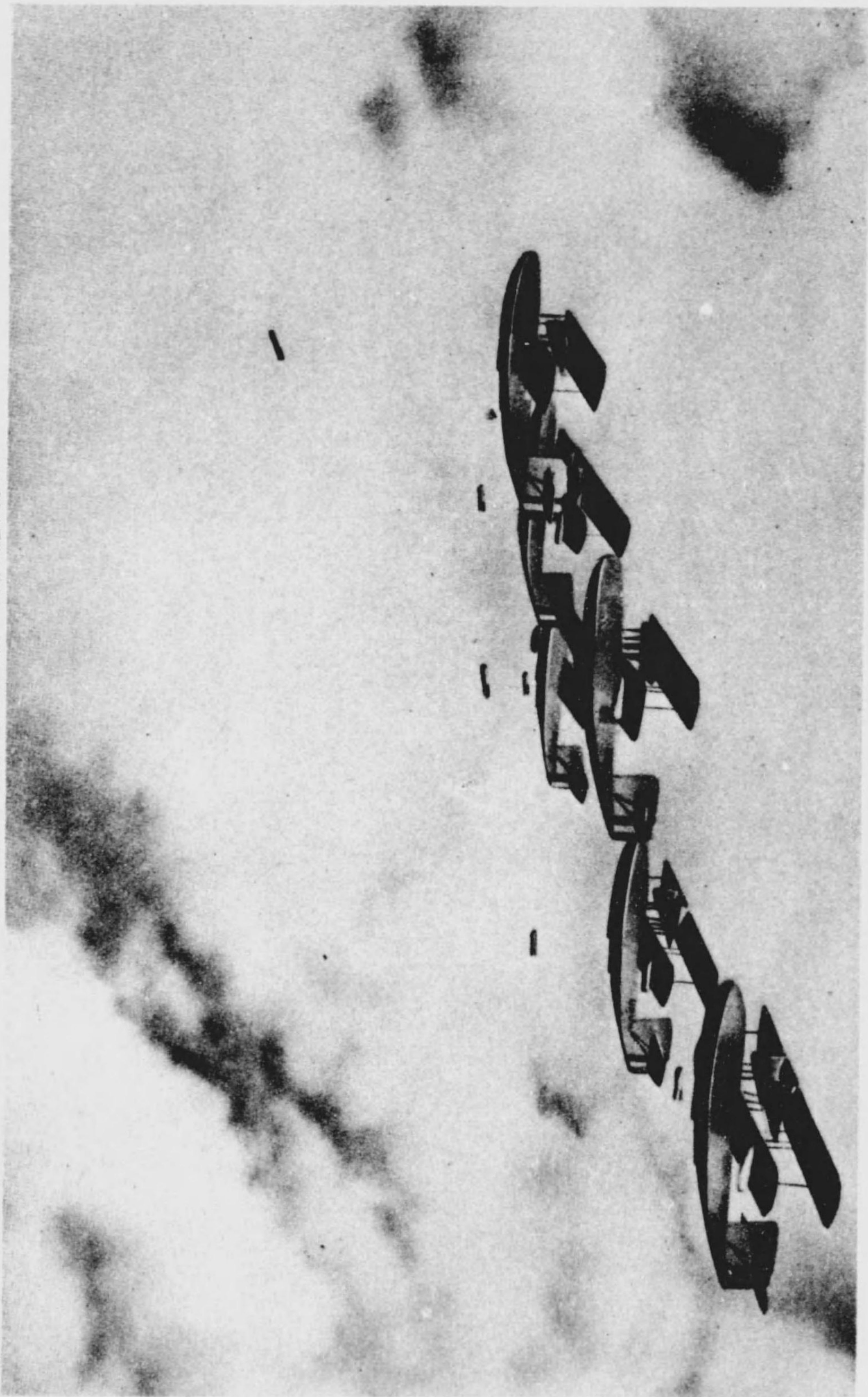
かれ等はどういふ方法で、日本を攻めるのであらうか。

日本空襲の根據地としては、南にフィリピン、グアム、香港がある。北にはウラヂポストック、スバスク、ニコライエフスクがある。西には北平、青島、上海、南京、杭州などがつらなつてゐる。

實に油断のならぬ陣形だ。空中作戦上、われ等は、三方をかこまれた形である。

だが、攻撃軍にも弱味がある。それは、以上の根據地が一つ二つを除いて、みな一千軒以上離れてゐるために、どうしても、重爆撃機だけで、攻撃して來なければならぬ點だ。

重爆撃機は、爆撃の威力は大きい、行動がのろい。かれ等は快速力の防空戦闘機と戦つたら、



米國海軍の爆撃機隊の投下

十中八九は、射落されるものと思はねばならぬ。だから、戦闘機に近い快速力の出せる重爆撃機がなければ、かれ等の空襲作戦は、失敗に終るだらう。

これが攻撃軍の弱味だ。しかし、日本は、この弱點をたのんで油断をすることは出来ない。世界の空軍は、今や遠距離爆撃、夜間爆撃について、血の出るやうなすさまじい研究をやつてゐるのだ。僕の心配する快速重爆撃機が、續々と、生れようとしてゐるのだ。米國のボーイングやマルチンの一九三三年製の重爆撃機は、一流戦闘機に近い三百軒以上の速力を出すことが出来るのである。また、重爆撃機を護衛するための遠距離用戦闘機も考へられてゐる。ドイツ製のK三十八號機はその一つだ。

ドイツのメルカツ大佐は、今後の戦闘機は、前に大砲を据えつけ、後と下に向つて機関銃二門づつを備へた怪物になるであらうと、見てゐる。

そして、「この怪物戦闘機は、従來の單座（一人乗）戦闘機を追ひまくることが出来る。」と、斷言してゐるのだ。

こんな怪物の大群が、マニラや杭州から攻めて來たら、わが防空戦闘隊も、たしかに苦戦には違ひ

ない。

われ等は、今後いよく防空の陣營を、強大にせねばならぬのだ。敵が大戦闘機主義で來るなら、こちらは大戦闘機で迎へよ。メルカツ大佐は、「某國陸軍の飛行隊には、驚くべき大戦闘機があり、それは大砲を備へてゐる。速力もすばらしく速い。」と洩らしてゐるが、われ等もそんなのが欲しい。日本はいよく深刻になる空中戦にたいして、今からあらゆる準備を急がねばならぬ。

わが手に握る極東の空中權

敵の第二の缺點は、その根據地が極めて短い間に、わが軍から占領され、又は爆撃される點だ。ウラヂポストック、上海、青島、マニラ、グアム、見渡せば、開戦後、みな間もなくわが軍に占領される目標の地點ばかりではないか。わが陸海軍の作戦が疾風迅雷の勢で進めば、敵はたちまち空襲出來なくなるのだ。危ないのは、占領までの短い間である。

そして、われ等は、その短い間も、敵空軍に勝手な行動をとらしてはならぬのだ。だから、かれ等が空襲をやりさうな時は、逆にマニラやウラヂポストックを攻めて、一撃で悪魔の巢窟をたゞき潰すのだ。敵が攻めて來ることばかり心配して、雲の影にもおびえるのが空中戦ではない。敵の出鼻をく

じいて、逆に空襲をやるのが、空中戦の秘訣である。

日本の防空作戦としては、東京を中心として、三千軒の圓ををぎ、その圓の中に入る地域には、絶対に、敵に大根拠地をおかせぬことを、原則にしなければならぬ。すなはち、沿海州、東支那、フイリピンの空中権を、わが飛行隊で奪つてしまふのだ。

それでもまだ、敵の大重爆撃機や、小編隊の偵察機なんかは、その圓の中心へ近づかうとするかも知れないが、それらは防空戦闘隊が、機關銃を鳴らして歓迎してやればいゝのである。

陸軍の第一線が興安嶺の西にあり、海軍の第一線が小笠原の東海上にあるやうに、わが空中国防の第一線も、三千軒の圓の外へ引かなくてはならない。

フランス空軍の第一線はロンドンの空にあり、イタリヤ空軍の戦略線は、バリの上空にかゝれてゐるのだ。日本が沿海州、北平、漢口、フイリピン、南洋諸島、カムチャツカと、極東を一まはりする国防線を引くことは、戦略上から見ても、誰からも文句をつけられることではない。

たゞ、この線が強い、弱いかは、わが空中兵力が、どのくらゐ強く、大いかによつて決るのだ。

戦略上から見た東京空襲

しかし、敵は陸上根拠地から攻めて来るだけではない。海上からも攻めて来るのだ。航空母艦が快速力で、單騎侵入して来たら、わが海軍の警戒線をくぐることは絶望でない。

だから米國の航空母艦群こそ、一番恐ろしい空の強敵である。冒險好きな司令官がゐたら、かれ等は東京の咽下深く、匕首をひらめかすことも出来るのである。

恐らく、米國海軍は、海上決戦の前に、航空母艦を日本艦隊の根拠地近くへ出動さすやうな冒險は、避けるだらうと思ふが、それは向ふの參謀の胸の中にあることだ。輕々しい判断は出来ない。

米國が高速爆撃機の研究に熱中してゐることは、すでに諸君の知つてをられる通りだ。

僕は、百機の精銳を乗せた「サラトガ」級または「レンジャー」が、大巡洋艦に護衛されて、房總半島の沖にあらはれることを、豫想せずにはゐられない。

この襲撃を防ぐために、横須賀軍港を根拠地とする哨戒隊が、絶えず東京灣外、房州沖、鹿島灘を警戒し、また海軍以外の海上監視隊も、トロール船や漁船に小さい無線機や信號器を積んで、沖合遠く出動するのである。

さらに關東平野全體、伊豆半島方面へかけて、防空監視哨の網が張られる。關東防空大演習では、實戦部隊に近いほど大規模の、監視隊、監視哨が遍成されたが、戦時には監視區域が、もう少し廣がる

から、約〇百の哨所が出来ると、豫想される。

この監視地帯の中に、海軍の霞浦、館山、横須賀の三航空隊があるが、これは敵にとって非常に恐しい關所である。

東京附近の地圖をひろげて見よ。東北の海岸から侵入したら霞浦にひつかゝる。東から来れば犬吠埼方面で、早くから発見される惧があり、それに下志津の陸軍飛行根據地の上を通らねばならぬ。南からすれば、伊豆七島の監視哨の眼を逃れることが出来ず、館山隊と横須賀隊から挾撃される危険がある。

だから、かれ等は最も防禦のうすいと思はれる千葉縣の中央部をめざすだらうが、われ等もまたその邊には、一番嚴重な防禦陣を布くのだ。

米軍空襲隊司令官の苦心は、僕等の想像以上であらう。大爆撃をやるためには、航空母艦を出來るだけ海岸に近よせなければならぬが、これは日本の潜水艦や沿岸航空隊に狙はれる惧があるから、非常な冒險だ。

かりに、やつと日本海軍の眼をくらすことが出来ても、監視網をくぐることは出来ない。しかも、東關東の平野は、日本空軍の本陣ではないか。



地陣砲射と高野戦——。し固は營陣の空防がわ

米軍の空襲部隊は全滅を覚悟して母艦を離れねばならぬ。どんなに豪膽な將校でも、この時は顔色が蒼ざめずにはゐないと思ふ。

東京防空戦

かれ等の攻撃は、恐らく深夜か、夜の明けきらぬ拂曉か、又は薄暗のたそがれである。東京警備司令官は、監視隊から「敵機襲來」の報告を受けると、すぐに防空飛行隊に向つて出動を命ずる。

防空戦闘機は、空へ掻き上るやうな急昇騰をやつて、三千米以上の高空に陣を張るのだ。

闇の空は、なにも見えない。關東平野は、早くも空襲警報によつて、燈火管制が行はれ、茫茫數十里、太古の武藏野の姿にかへつたやうに、一點の光も見えないのである。

その闇を破つて、數十條の光が放射される、照空隊が敵機の姿を探してゐるのだ。

やがて、光は敵をつかまへる。敵機の姿がほーつと映る。

それをめがけて、わが戦闘機は、闇の中から、襲撃するのだ。そして血の出るやうな格闘がはじまるのだ。

この空中戦闘によつて、敵軍は大損害を受けるだらうが、全滅まで行くか、どうかは疑はしい。ロンドンの防空戦演習でも、夜襲の時は、攻撃軍の損害が、非常に少ないのだ。

だから、敵機の主力は、この戦闘地帯をのがれて、さらに進撃するものと、豫想しなければならぬ。

わが軍は飛行隊の戦闘地帯のずつと奥に聽音機を据ゑ、さらにその後、高射砲陣地を布いて、そこで第二段の防戦をやるのだ。

夜の空は、照空燈の光と、高射砲弾の炸裂とで、異様な色に染められ、弾丸をうけた敵機が、赤い流星のやうに、炎の尾をひいて墜落するだらう。

わが高射砲隊は、陣地の上、約一千米から一萬米内外の空に彈幕をつくり、高射機關銃隊とともに、死物狂ひの奮戦をやるのである。

高射砲の命中率は、米國の砲兵雜誌を見ると、十五パーセントもあつて、高射砲一門が、一分間に、二、三發命中することが出来るわけだが、夜の戦闘ではさうは行かない。

敵機は、恐らくこの陣地も突破して、さらに「夜のくらげ」とよばれる阻塞氣球の柵を、四、五千米の高さで乗りこえ、東京の中心地帯へ進入するだらう。

そこで、かれ等はいよいよ爆撃をやるのだ。
そして、わが第二陣の防空飛行隊と高射砲隊が、この悪魔の最後の一匹を射ち落すまで、奮戦をつづけるのである。

この防空戦で疑問になるのは、米國空軍が、果して關東平野の中で、東京が発見出来るかといふ點だが、白く光る海の中へ黒々とつき出した房總半島や、三浦半島の形は、夜目にも見えるはずだ。また、利根川や荒川の流もかれ等の目標になるだらう。

だから、かれ等が、少なくとも大東京の空へ進入することは、豫想しなければならぬのだ。

空から見た東京は眞つ暗闇だから、照明彈を落しても、かれ等が丸の内と大森方面とを間違へたり、中野、目白方面を東京の中心と思つて爆撃したりするやうな失敗はあるだらう。

——だが、すでに房總半島と東京灣とを見つけたら、かれ等は、まづ目標を誤らないものと見ねばならぬ。

防護團は國民義勇軍だ

東京防空戦は、われ等日本民族が、歴史あつて以來、はじめて行ふ帝都防衛戦である。筑紫の海岸を侵されたり、對馬や壹岐を荒されたのは譯がちがふ。

東京は、日本の聖地である。帝都の空は、神聖である。斷じて汚されてはならぬのだ。

われ等は死力をつくしても、これを守らねばならぬ。だから東京警備司令官のひきゐる軍隊が、決死の防戦をやるほかに、警視總監は警察隊を指揮して、大東京の不安と混亂を防ぐのだ。

消防隊にいたつては、その任務はもつとも重大だ。僕はわが精銳な消防隊が、鋼鐵さへ銛かす敵の焼夷彈と悪戦苦闘する姿を思ふと、一種の身慄ひを感じるのである。

そして、國民義勇軍ともよぶべき防護團が、憲兵隊、警察隊、消防隊、衛生機關の補助隊となつて、奮闘するのだ。

この防護團は、今後いよいよ大きくなるであらうが、どうかして數年の中にロシアの國民軍、國防航空化學協會に追いつきたい。この義勇軍の組織が大きく、そして強くなつたら、日本は、どんな空襲にでも耐へられるのだ。

空襲で一番恐しいのは、焼夷彈と毒瓦斯彈の投下だが、それも政府の消防隊と防毒隊を主力として、防護團の消火班、防毒班等が奮闘したら、決して耐へられぬものではないのだ。

焼夷弾のテルミットが火を發すると、三千度の恐しい高熱を出す。鋼鐵は千百度の熱で溶けるのだから、三千度の猛火は、まさに地獄の火ではないか。米國のマルチン爆撃機は、一機で、百の焼夷弾を携けて來るのだ。

かれ等の一編隊に襲撃されたら、東京は火の海になるかも知れぬ。これを防ぐのは、たゞ消火隊の決死的行動だけである。

さらに、どろ／＼の毒瓦斯イペリットが投げられた時のことを考へると、思はず膚が粟立つのである。これに觸れるものは、みな腐るのだ。戦場の軍隊でさへ、この毒で攻められたら耐らないのだ。

われ等は、もつと／＼強大な防毒班を持たねばならぬ。そして、濛々と煙るホスゲン瓦斯にも、雨と降るイペリットにも、屈しないだけの、防毒室や避難所をつくり、防毒面や防毒衣は、一人々々で準備するくらゐにならねばならぬ。

また、惡魔のやうな敵は、水源池をねらつて、チブス菌、コレラ菌、狂犬病菌などをふりまくかも知れない。だから、水源池は、最も警戒を嚴重にして、濛々たる煙幕でかくすであらう。

僕は、わが民族の精神力を信ずるから、かりにも敵機の爆音を聞いただけで、はや浮足立つやうな者があらうとは思はぬが、戦を忘れる者は、心が弱くなる。



機・闘・戦・式・一・九。士・勇・の・戦・空・防



業・作・毒・消・の・隊・防・毒・一。撃・攻・斯・瓦

弱い心と弱い神経は、防空戦では一番禁物だ。

「戦場のわが軍隊が強いやうに、非戦闘員の心も強かれよ。」と、僕は祈らずに、おられないのである。見よ。米國海軍は新鋭の航空母艦「レンジャー」を第一線に迎へて、艦上爆撃隊の兵力は、早くも六機編成の小隊で、三十小隊を越した。

五月一日、モスコの赤い廣場には、三百機の大空軍が梯陣をくんで堂々と分列式をやつた。わが空軍は、この二大強敵をむかへて、遠く第一線へ出て行かなければならない。

戦略的に見たら、わが軍は恐らく敵を東京の三千軒以内に入れないであらう。しかし、昔、秦の始皇は万里の長城を築いても、なほ蒙古人の侵入を防げなかつたではないか、まして空には長城は築けない。

空軍が千里の陣をひろげても、敵機はその隙をねらつて攻めて來るのだ。

東京は、いよく眞剣に、防空準備をつづけなければならぬ。

動員令下れば

軍隊の動員

太平洋戦争又は極東戦争のやうな大規模な戦争になると、軍隊の組織は、平時態勢から戦時態勢に變るのである。

戦時編制は、軍機中の軍機だから、厳秘にされてゐる。蒙古方面に向ふわが師團が、はたしてどんな編制で出征するか。又第何師團がどの方面へ向ふか、そんなことはみな秘密である。

しかし戦時の師團が、非常な大兵力になることは疑ない。歩兵四個聯隊、騎兵一個聯隊、野砲兵（又は山砲）一個聯隊、工兵一個大隊のほかに、装甲自動車隊、戦車隊、野戦重砲隊、高射砲隊、照空隊、電信隊、飛行隊、衛生隊、野戦病院、各種の縦列（輜重）などの全部か、一部がつけられるだらう。

だから兵隊の數も、三萬近くになり、馬や車輛の數も大變だ。

動員令下れば

平時、わが陸軍の戦略單位は十七個師團だが、かりに蒙古、シベリヤ方面で赤軍の大兵と陣地戦でもやることになる、これでは、とても足りないのである。

世界大戦の時のドイツ陸軍を見ると、一個師團が三個師團にも四個師團にもなつてゐる。

明治三十八年の奉天大會戦の時、戦線に出てゐたわが軍の兵力は、平時の戦略單位十三個師團のほかに、歩兵だけで十二個旅團もあつた。

これ以外にも、奉天戦の少し後に、第十三師團は樺太へ向ひ、第十四師團、第十五師團、第十六師團も新しく動員され、實に大規模な陸軍になつたのである。しかし、この大兵力でも、なほ四十九個師團のロシア滿洲軍に向つて最後の決戦をやるとすれば、非常な苦戦になるだらうと、心配されてゐたのだ。

今の赤軍は、いざとなれば、極東に向つて、少なくとも八十個師團以上の兵力を動員するだらう。これにたいして、わが軍がいくら師團をもつて戦ふか、それは知らぬ。

しかし、わが陸軍は、毎年毎に新しく動員計畫をたてて、極東防衛の備にぬかりはないのである。かりに今、全軍にたいして一時に動員令が下つたら、歸休兵、豫後備兵の充員召集、軍馬の徴發、動員部隊の裝備と、すべての計畫が機關車のやうな速さと正確さで行はれ、たちまち非常に大きな部隊

が編成されるのだ。

そして、この大軍隊が、大本營を中心として動き出すのだ。まさに「貔貅百萬」をもつて、堂々の陣を極東大陸に張るのである。

これは支那なんかでは、とても見られない壯觀だ。かれ等は平時から二百萬の大兵を備へてゐるかはりに、戦時になつても、さう急に、大した變りはないのである。

又、これと反對に、米國陸軍では一九一七年（大正六年）の四月から十一月へかけて、五十五個師團、三百六十八萬人の大軍を動員して、驚くべき底力を見せたが、平時の師團が少ないために、豫後備兵が少なく、急ごしらへの師團は新兵ばかりで、みな戦闘力の低いものだつた。

だから、フランスの戦線へ行つても、すぐには獨りで戦ふことが出来なかつたのである。今の參謀總長は、「四百五十萬の大軍を動員する」と威張つてゐるが、烏合の衆は恐れるに足りない。

わが軍のやうに、精銳な豫後備兵を召集する動員こそ、ほんたうの凄味があるのだ。

動員された師團は、大本營から令された戦闘序列により、軍用列車と運送船に乗つて、大陸の戦場へ輸送されるのである。

この軍事輸送も、陸軍運輸部で、一切の計畫が出来てゐるのだ。

動員令下れば

陸軍が動員してゐる時に、海軍も火の出るやうなスピードで、出師準備をやるのである。

軍令部長は、參謀總長とともに大本營の幕僚長となり、雄大な海軍作戦の計畫をめぐらすのだ。聯合艦隊は戦時の態勢になつて、非常に大きな兵力になる。戦列部隊が大きくなるばかりでなく、補給部隊や工部部隊がつき、根據地や防備部隊までが、聯合艦隊司令長官の指揮の下に入るのだ。

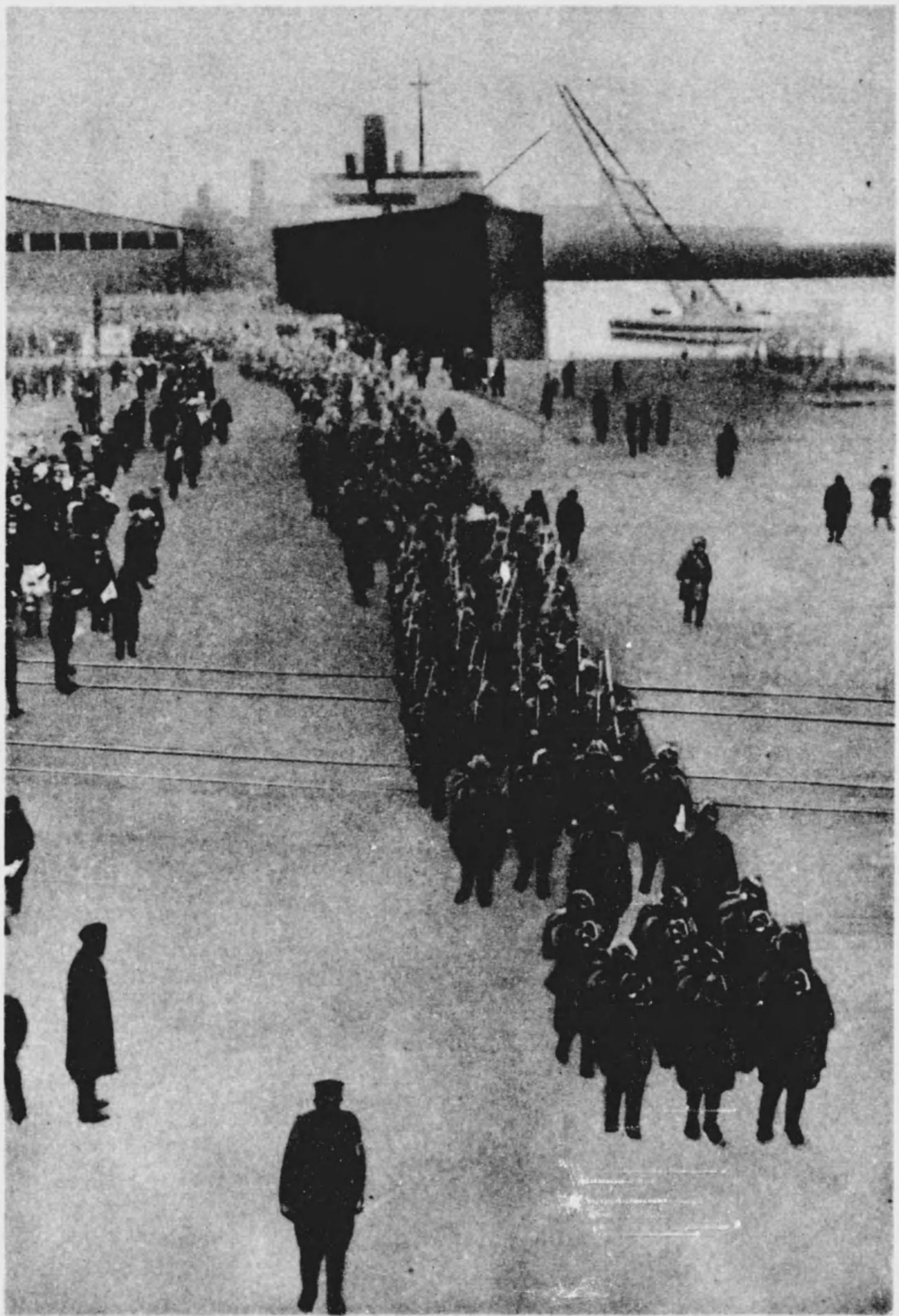
この出師準備も絶対に秘密であるから、どの艦に水上機を何機つみ、砲彈が何發つまれるか、そんなことは分らない。又、A艦が第〇戦隊に編入され、B艦が第△戦隊へ入るのか、それも分らない。

たゞ、わが海軍のありとあらゆる戦闘機關が、一せいに激しく動き出すのだと思つていたゞきたい。

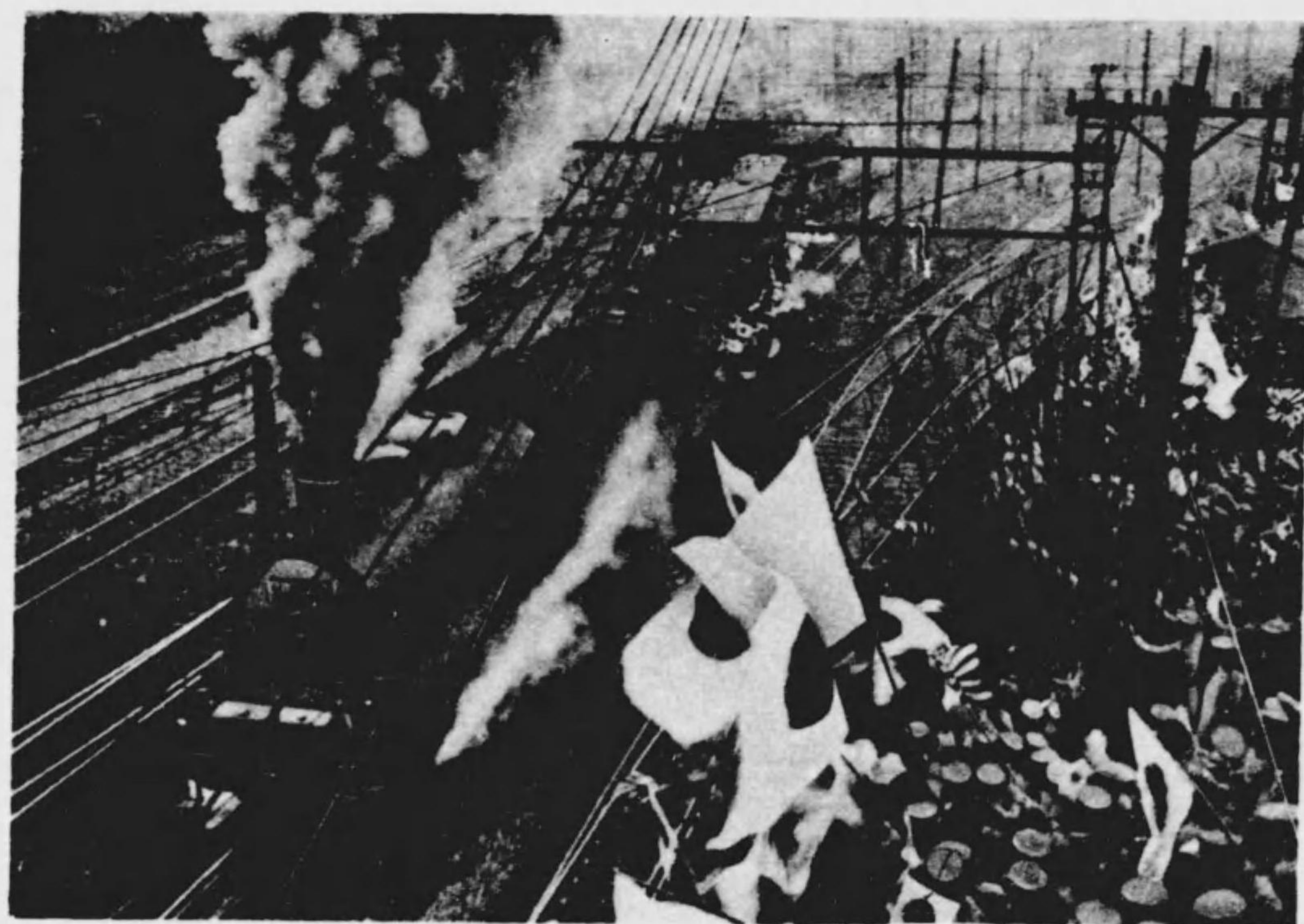
又、軍港、要港や、重要港灣の防備機關も、ぐつと大きくなる。これは驅逐艦や潜水艦のほか、航空機、機雷敷設艇、防材敷設艇、掃海艇、哨戒艇などが、白波を蹴つて海上を警戒し、灣の内外に防材や防禦網を張りまはし、機雷を沈め、魚雷射壘を築き、要塞以外の假の砲臺もこしらへるのだ。

高角砲、探照燈も港の内外に据ゑられ、巡視、見張は嚴重を極め、もの／＼しい嚴肅な空氣が海上にも、陸上にもみなぎるのである。

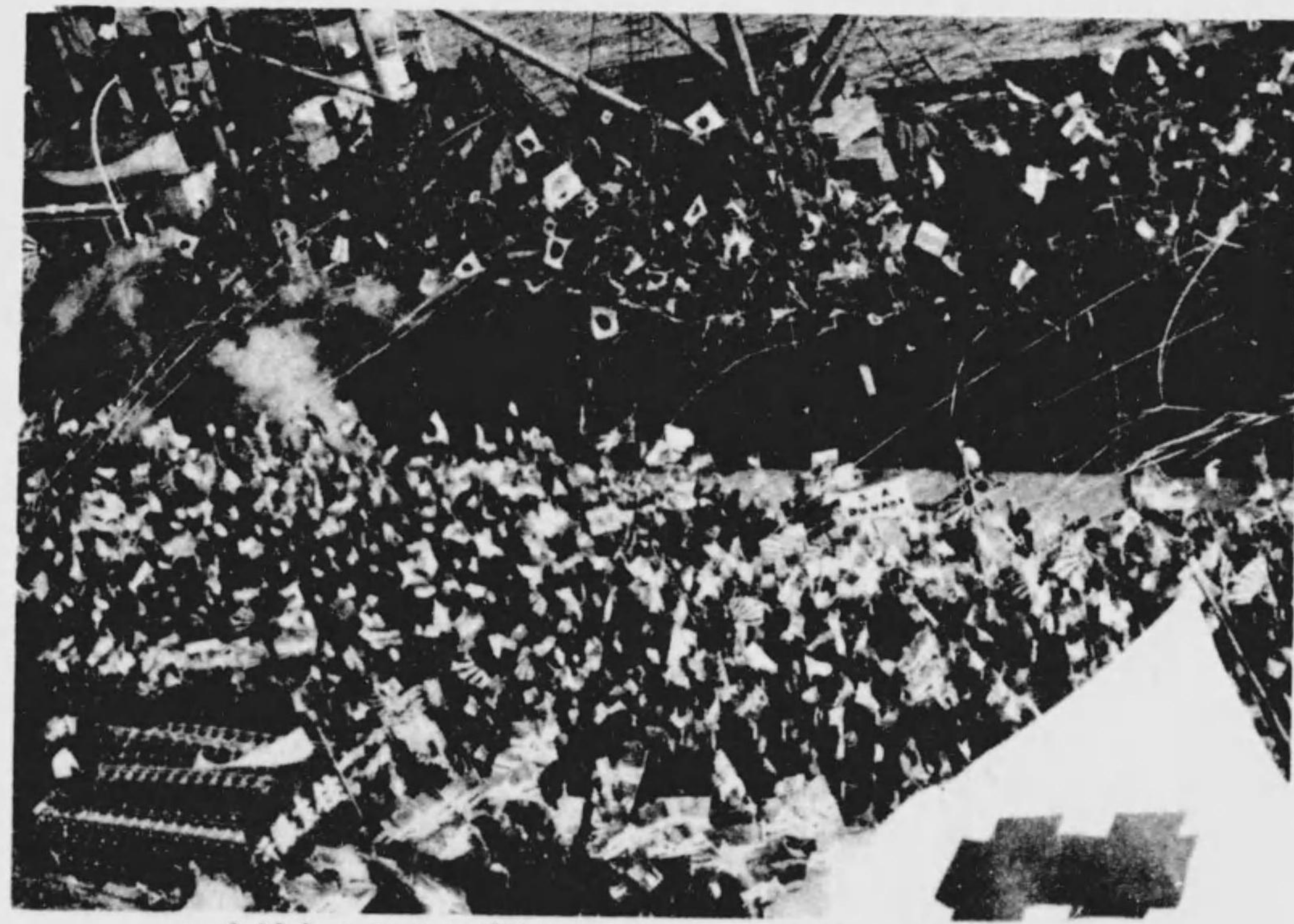
そして、陸軍で、動員の終つた師團が、續々と戦闘序列にしたがつて動き出すやうに、出師準備の終つた艦隊は、聯合艦隊司令長官の命によつて一地に集中し、次の命令をまつのだ。



陸上へ面の方某もく早。ばれ下令員動



出征の部隊は各々、つて従に列の序に戦闘。——



いなはりかぬもに畫計送輸。へ船送運りよ道鐵

諸君、眼を瞑つて想像して見給へ。樺太から南洋にいたるまで、赤紙の召集令状が飛び、豫後備兵、補充兵が、兵營に向つて集るのだ。

陸軍のあらゆる倉庫は鍵を外して、兵器、彈藥、材料、糧秣が山のやうにつまされる。そして、カーキ色鮮やかな第一装の軍装をした部隊が、續々として衛戍地を出勤するのだ。

かれ等に乗せた數十、數百の列車は、黒煙を吐いて、激しい音をレールの上に残しながら、西へ西へと走るのだ。

海には臨戦準備を終つた艦艇が、長砲を天の一角に向けて、〇〇方面に集中し警戒の水上機は、海上遠く爆音をひびかせ、偵察隊の一部は、早くも太平洋はるか、偵察の任務を帯びて出勤するのだ。

各要塞の重砲は、砲門をひらいて、海上を狙ひ、陸海軍の工廠をはじめ、あらゆる軍需工場は殺氣を帯びて、作業の速力をはやめ、憲兵隊と警察隊は二重三重の重大任務に血眼となり、日本全體が大機械工場のやうに、激動をはじめるのである。

大本營を中心にして、政府の組織も變るかも知れない。帝國議會はたちちに召集されて戦時餘算を議決し、内閣はあらゆる手段をつくして、軍の作戦を接けるのだ。

そして、秋の霜よりも嚴肅な戒嚴令が布かれ、國家總動員令が下る時は、いよいよ有史以來の大戦

動員令下れば

動員令下れば

が、極東の山野と、太平洋の波の上に、硝煙なまぐさく行はれてゐるのである。

國家總動員

世界大戦の時、ドイツは三千三百五十万人の男の中、千三百二十五万人が動員され、フランスは千九百五十万人の男の中、七百九十五万人が召集された。ほとんど男の半数が軍隊に入つたのである。この大軍隊がみな武器を持つて戦つたのだから大變だ。戦争の終りごろ、フランス陸軍が持つてゐた兵器は、

火砲 約 十二萬門、	迫撃砲 約 四千門、	機關銃 約 三萬七千銃、
自動車 約 十四萬臺、	飛行機 約 三千三百機	

だつた。このおびたゞしい兵器を製造するためには、國家の工業力を總動員しなければならぬ。

ドイツは小銃弾だけでも、開戦後一年目には日に二十五萬發つくり、三年目には日に四十四萬發製造してゐた。

フランスは、開戦後一年ほどは、一日に九機しか飛行機を造ることが出来なかつたが、四年目には一日に百二十機を製造してゐたのである。

日露戦争の時のわが滿洲野戦軍は、わづか百四萬發の砲弾しか射たなかつた。それでも沙河會戦の時などは、參謀長兒玉大將が「彈丸が足らぬ、彈丸が足らぬ。」と、地團駄をふんで口惜しがつたのである。それほどわが工業力は貧弱だつたのだ。

ところが、世界大戦の時のドイツ陸軍は、實に五億八千萬發の砲弾を射つてゐるのだ。いや、ソム會戦の時に、フランス砲兵が射つた彈丸の数だけでも、日露戦争全戦役の射弾の十倍以上もあつたのだ。僕は、太平洋海戦も、極東戦争も、決して、世界大戦の時ほど、兵器はいらないと思つてゐるが、それでも日露戦争などは非常な違ひであらう。こんなに多數の兵器をつくるためには、とても陸軍工廠や海軍工廠だけでは駄目である。

獵銃工場、火藥工場はもとより、飛行機工場、自動車工場、造船工場は、政府の命令によつて、すぐに軍需工場としての作業をはじめめるのだ。

製鐵、伸銅、車輛、化學、肥料などの各工場も、動員される。

そして、自動車工場は戦車、装甲自動車をつくり、護謨工場は、防毒面をこしらへ、あらゆる工場が、軍需品の製造にとりかゝるのだ。

政府内には、産業參謀本部のやうなものが出来、國家が産業を統制するやうになるだらう。

動員令下れば

あらゆるものが、作戦の立場から考へられるのだ。工業だけではなく、通信、交通、農業、商業、などの、あらゆる産業が、政府の手に握られるのである。

ことに農業などは、農夫の大部分が戦場へ向ふのだから、地方の中學生などは、恐らくみな鋤を持つて起たねばなるまい。又、軍費はどうするか。

世界大戦の時のイタリヤの軍費は、約百七十億圓だつた。フランスは約六百億圓であつた。

この大軍費を出すためには、増税をはじめ、色々思ひ切つた手段をとらねばならぬが、この時には、何よりも愛國公債の力が大きい。われ等は自分の経済の許すかぎり、公債を買はねばならぬ。

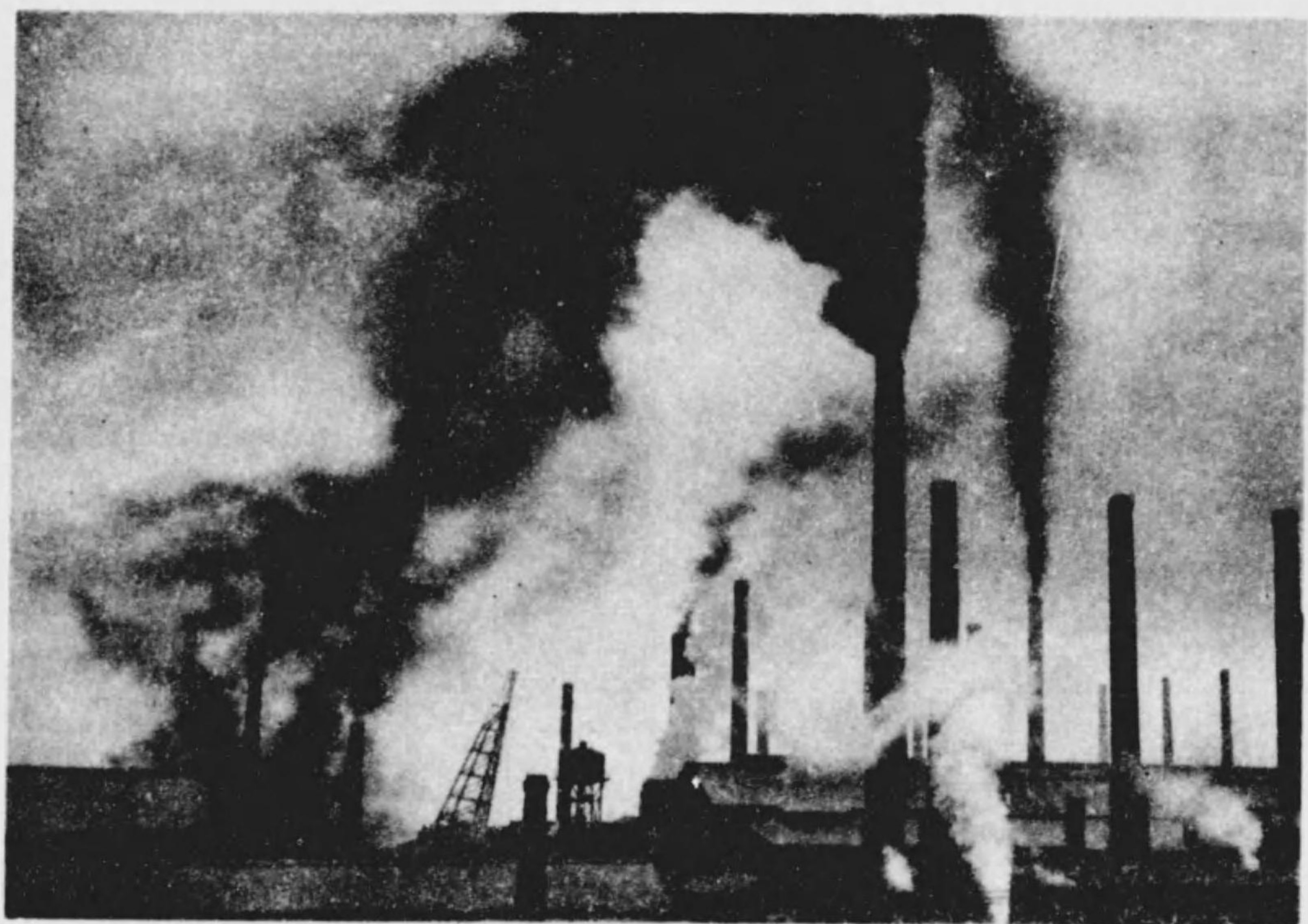
フランス、イタリヤの戦時経済力から見ると、わが國は、五百億圓、又は六百億圓の戦費に耐へることが出来るのである。

『そんな大きな戦費を出したら、國家も民族も疲れてしまつて、戦後には、二度と起ち上る力がなくなるだらう。』と思ふ者があるかも知れないが、斷じてそんなことはない。

フランスを見よ。イタリヤを見よ。戦勝國は経済的にも勝利者なのだ。英國が弱つてゐるのは、國家がちりちりに分裂してゐるからである。僕は日本が、二百億圓や三百億圓の負擔でへたばるなんて、それほどわが國力を疑ひたくはないのだ。



士勇の後に銃を撃つる守を園の田



しなところへ憂は力業工需軍。りあ力業工のこ

精神動員

このほか、精神動員として、研究室の科学者を總動員し、新兵器や軍需品の研究をやる。又、學者や學校や新聞雑誌や映畫を總動員して、思想戦をやるのである。

この思想戦は赤軍が非常に熱心に研究してゐるが、戦時には、かれ等は多くの間諜をつかつて、日本の悪口をふれまはるだらう。

まさか、日本人でかれ等に騙されるものはあるまいと思ふが、油断は出来ぬ。ロシアは平時から、わが國へ手をのばして、思想侵略をやつてゐるのだ。

ロシアだけではない。米國も思想戦をやつてゐる。

思想戦で一番恐ろしいのは、甘い言葉で、何となく、わが國が悪くて、敵國の方が悪くないと思はせるやうな議論がひろがることだ。

だから、戒嚴令が布かれたら、怪しい家や郵便の検査がはじまり、新聞や雑誌や映畫で、少しでも作戦の邪魔になるものがあれば、どん／＼禁止するのである。

防空戦の時に、燈を消すのを忘れたりしても、場合によつては、敵の間諜と思はれるかも知れない。

又、「わが軍が敗けた。」とか、「敵が今にどの方面へ攻めて来るだらう。」とか、事實無根の流言をいひふらしたりすると、これも犯罪である。

又、「第一〇艦隊が小笠原の父島へ入つた。」とか、「第十〇師團が南支那へ向つた。」とか、軍機に關する事柄を洩らした者も同罪だ。

戦争に間諜はつき物だが、鐵道を爆破したり、發電所を破壊したり、又軍部の將軍や政府の大官を狙つたりするもの、妻い者をはじめ、情報を集めたり、煽動をしたり、非戦論をしやべつたりする連中にいたるまで、間諜の数は、すゝぶんど多いと思はねばならぬ。

又、中には自分で間諜と思はずに、敵國の手先になつて變なことをする者もあるだらう。満洲事變や上海事變にも、そんな人が見えた。

しかし、それは戒嚴令が布かれてゐないからその隙に起るので、一たん戒嚴令が布かれ、國家總動員令が下つたら、もう議論の時ではない。間諜的な行動を見逃したりは出来ないのだ。

日本は、大本營を中心に、一心一體になつて動かねばならぬ。ドイツのやうに、前線の軍隊がどんなに猛烈に戦つても、後の國民に戦ふ氣がなくなつては、とても勝てやしない。

われ等は、どこまでも頑張つて、最後まで精神力を弱めず、勝たねばならぬ。意氣銷沈してはな

らぬ。

太平洋海戦も極東大戦も、考へ見れば、大自然が日本民族に加へる試煉である。

この試煉に耐へることが出来たら、その時こそ日本は、建國の理想を堂々で行ふことが出来るのだ。

われ等は、國家總動員の状態に、三年でも、四年でも耐へられるだけの精神力をきたへねばならぬ。

僕は作戦も、武器も、食糧も心配しない。

たゞ心配になるのは、精神の力だ。理想を忘れた民族に、決して苦戦十年の大戦争は出来ぬ。三年も危ない。

僕は、日本民族が、明治時代よりも、もつとく大きな理想に燃えた、偉大な精神的民族になることを心から、祈らずにはゐられない。

日本の戦力

軍需工業の原料はあるか

僕は、日本の戦力を論じて来て、どんなにわが國の國防線が強いかを明かにした。

最後に残つてゐるのは、「強いことは強いが、長い戦争は出来ないだらう」といふ疑問だ。

これに對しても事實は、はつきりと「否、日本は長い戦争に耐へられるぞ」と、こたへてくれる。

第一に人口の點では絶対に心配がない。

次に軍需工業の原料はどうか。

まづ機械工業の原料から見ることしよう。今までの日本は、不幸にして鐵が少なかつた。釜石の

ほか、朝鮮を合はせて十ばかりの鑛山があるきりだつた。しかし、今は違ふ。見よ、滿洲には鞍山、

本溪湖があり、弓張嶺があるではないか。八億噸から十五億噸の鐵が滿洲の山には埋藏されてあるのだ。

又、製鐵工業を見ても、八幡製鐵所を第一に、鞍山、本溪湖、釜石、兼二浦などの大工場が濛々と黒い煙を吐いてゐるのだ。戦時一年に五百萬噸や六百萬噸の鐵をこしらへるのに、苦しむやうなことは、絶対にないのである。

支那大陸は鐵を埋藏してゐること、世界第一だ。こんな鐵鑛地帯の近くにおて、鐵飢饉などがあつ

て、たまるものではない。

又、鋼鐵の研究では、わが國が斷然世界第一であることを忘れてはならぬ。僕等は東北帝國大學の金屬材料研究所に、大いに望をかけていたのである。

銅は全然心配がない。日立、足尾、別子、小坂等の大銅山が、五つも六つもひかへてゐるのだ。

砲彈の原料の亞鉛と鉛も、平時こそ不足してゐるが、神岡鑛山をはじめ工業力はうんとあるのだから、戦時にはすぐに自給出来るやうになつてゐる。

輕金アルミニウムは、飛行機材料としてなくてはならぬものだが、日本には悪い原料しかない。しかし、苦心研究の結果、戦時の輕金工業は、まづやつて行ける豫想がついてゐるのだ。ことに、南洋方面はこの原料がうんとあるのだから、海軍が頑張つてゐるかぎり、くよくよすることは、ないのである。又、滿洲にある十億噸の耐火粘土も、戦時にはアルミニウムの原料になるのだ。

ニッケル、ことに、ニッケル・クローム鋼も、兵器工業になくてはならぬものだが、これはカナダのほかには、ほとんど出ない原料だ。

しかし、しかし日本には小さいながらニッケル鑛山があり、又、わが科學者は、ニッケル・クローム鋼に負けぬ合金鋼を考へ出した。もう、これで、「何でもやつて來い。」だ。

工業國日本は、四年や五年の戦に屈するものではないのである。

次に化學工業の原料はどうか。第一に飛行機や自動車のタイヤや防毒面の原料になる護謨だが、これはわが海軍の行動圏内（繩張）にある南洋の産物だ。海軍が負けぬかぎり、輸入が途絶えるやうなことは絶対にない。そして、わが護謨工業の腕前は、世界に鳴りひびいてゐるのである。

火藥工業を見ても、外國に劣らない。高級な爆藥がどん／＼造られ、どんな大戦をやつても、ひるまないだけの力がある。

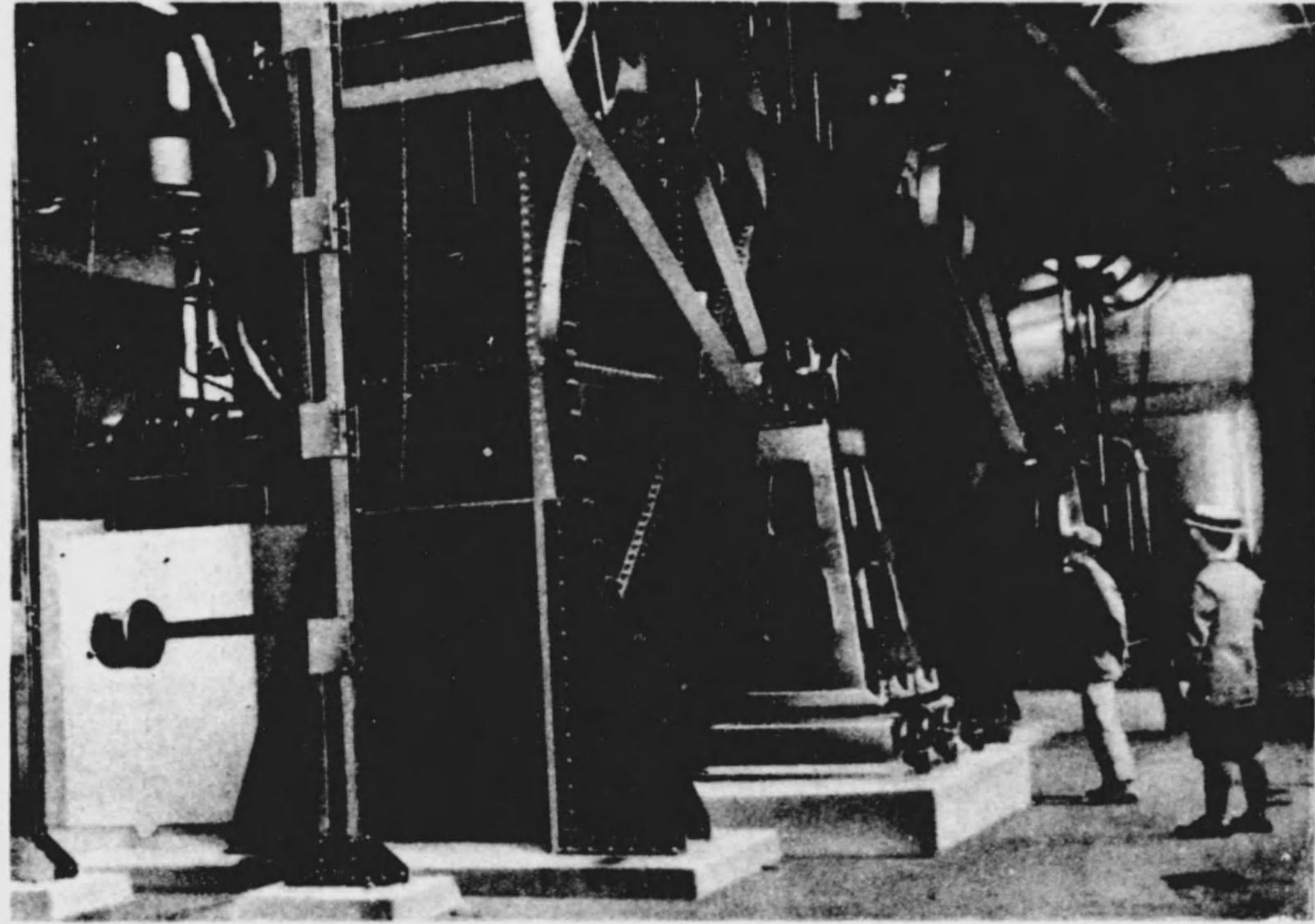
そのほか、窒素や、硝酸、鹽酸、硫酸などは、あまりかへつて困るくらゐだ。

軍需品の中でも、ことに重大な硝子や染料の原料になる曹達灰工業も、立派に獨立してゐる。鹽も滿洲があるから、大丈夫だ。

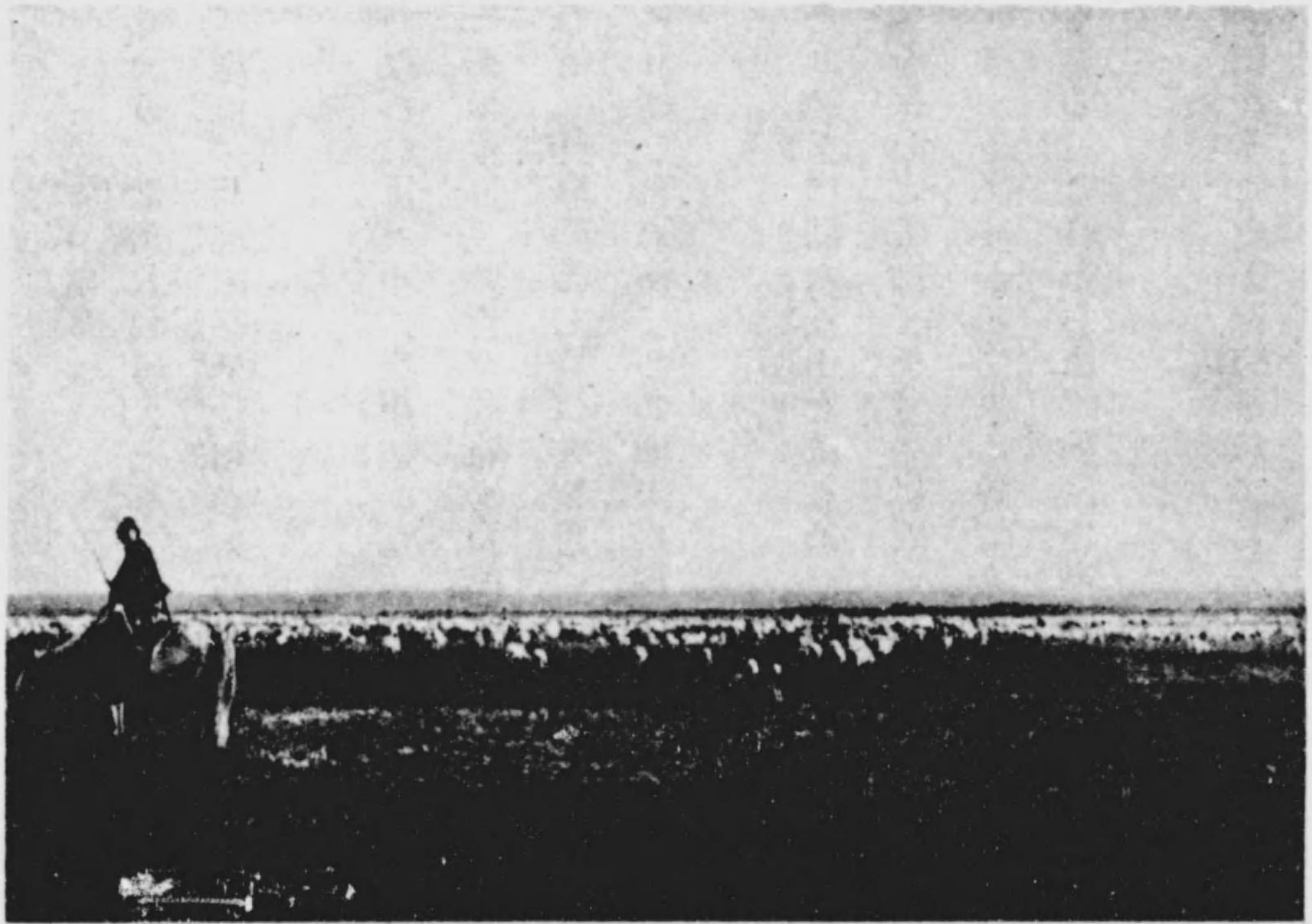
びくともせぬ日本の産業

燃料は軍隊にとつて生命の糧だ。ドイツが五年間戦へたのも、ライン河附近の石炭があつたからだ。まづ石炭をしらべて見よう。

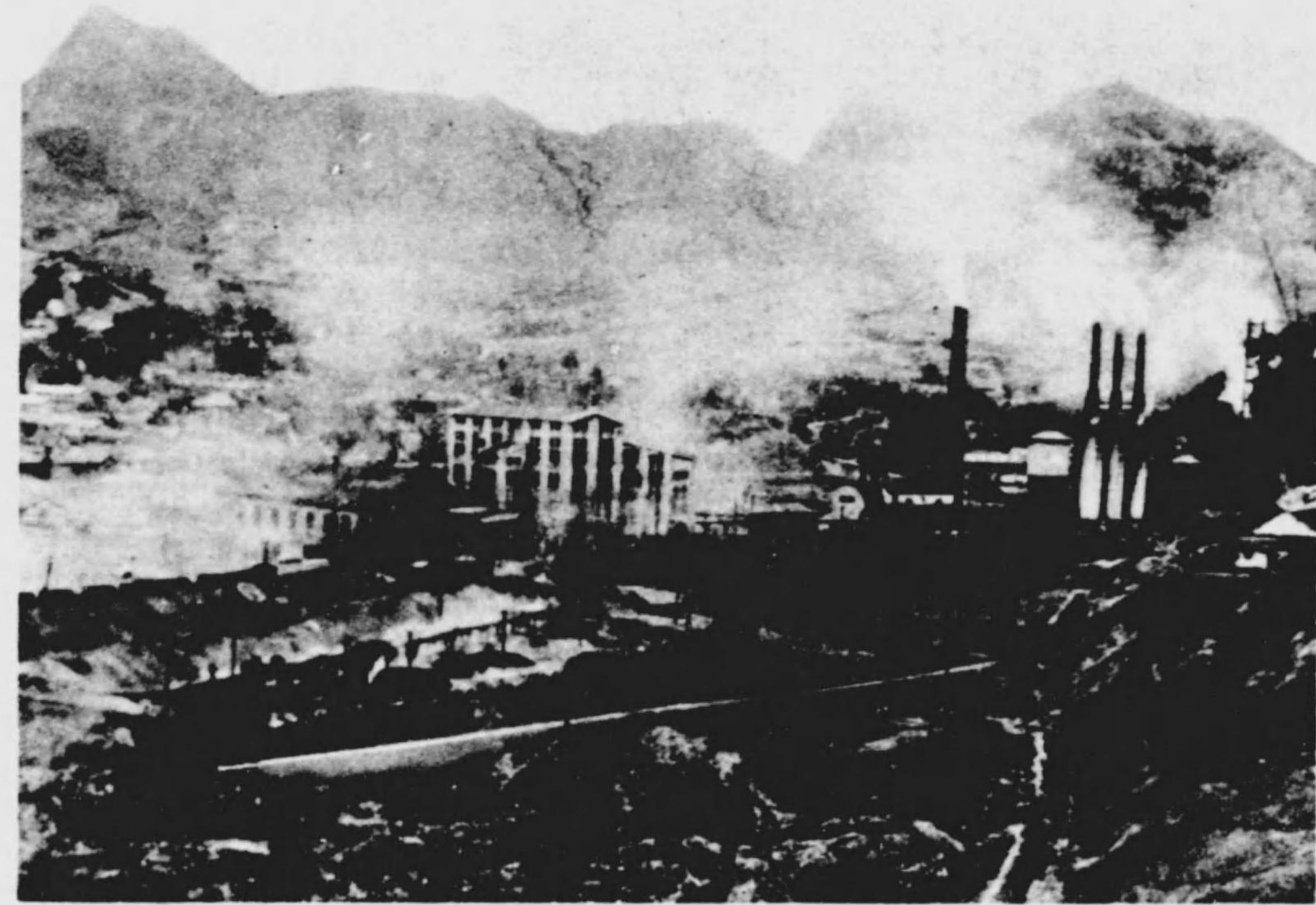
石炭は燃料としてだけではなく、火藥、染料の原料にもなるのだ。



場工ルエシ・ルイオ。なるす配心とを足き不^レ料^レ燃^ル



よ見^ルを群^ル羊^々の古^レ蒙^ル——。れかなく歎^ルとしな毛^々羊^々



(湖^ニ溪^ニ本^ニ流^ル)。りあ山^々鞍^々、湖^ニ溪^ニ本^ニ流^ル。夫^レ丈^々大^々。鐵^々



坑^ニ炭^々順^々撫^ル——。田^ニ炭^々大^々よ見^ル。炭^々石^々

わが國は年に約三千五百萬噸の石炭があればいいのだが、戦時にはうんと變つて来る。一寸心配する人があるかも知れないが、後に撫順、煙臺、新邱の滿洲炭田があるから、びくともするものでない。

石油は、世界大戦の時、「血一滴と石油一滴」と叫ばれたほど重大な軍需品だ。ことに海軍と空軍にとつては、原動力だ。これがなければ、動くことも出来ない。いや、陸軍も自動車時代が來てゐるのだ。もしも石油が非常に足りないやうなことがあれば、作戦の苦しさは大變だ。

今後の日本は平時約二、三百萬噸以上の石油がなければならぬが、わが油田からは、三十萬噸ぐらゐしか出ないのである。

しかし北樺太にはオハ油田以下、いゝ油田が澤山あり、又、錦水油田をはじめ、臺灣にも大きな石油地帯があるのだから、苦心すると、約百萬噸の石油を探ることは、絶望ではないと思ふ。

しかし、これでもまだ不足だ。そこで滿洲のオイル・シニールが出て來るのである。オイル・シニールは油をふくんだ岩だが、撫順だけに五十五億噸もある。これからは、約三億噸の石油が採れるはずだ。

戦時にはこのオイル・シニール工業が非常に大規模になることが豫想されてゐる。

そのほか、臺灣の砂糖からもアルコールが採れるし、滿洲の大豆（二十萬噸）も、液體燃料の資源である。

かうして見て來ると、日本の戦力は實に強大だ。機械工業も、電気工業も、どんな大戦にでも耐えられる。平時では機械なんか、輸入が多いが、いざとなれば、わが工場で立派に造ることが出来るのである。一番後れてゐると見られる自動車だつて、そんなにびく／＼することは無いのだ。造船工業に至つては世界にも冠絶してゐるのである。

羊毛と棉花の入つて來ぬことは一番苦しいが、これも、二年や三年は耐へられる。その中に、滿蒙の牧畜と朝鮮、滿洲の棉花農業を盛んにすれば、心配はいらぬのである。

食糧に至つては、極東は、世界の一大農業地帯である。御心配御無用と高く叫びたい。

しかも以上は、わが國が絶対に封鎖された時の状態を假定して見たのだ。

ほんたうは封鎖なんか、なか／＼されるものでない。日本を南から封鎖するには、どうしてもシンガポールが根據地になるのだが、あの軍港に英國海軍が、全戦力を集めることが出来るか、出来ないか。

も一度、前篇「太平洋に戦はば」をくりかへして見ていたときたいのである。日本海軍の戦力が衰へぬかぎり、南洋は、永久に、日本に向つて石油と護謨と砂糖を捧げてくれるのだ。

わが陸軍が儼然としてある以上、支那大陸に悪魔の侵入を許さぬ。支那の鐵と石炭と棉花は、ながく日本を援けることになるであらう。さらに滿洲國の大資源が、どんなにわが戦力を強くしてゐるかは、今さら聲を大きくするまでもあるまい。

あゝ、日本を中心にして、極東の大陸と南洋の群島は、こゝに一つの大きな自然の經濟同盟を形づくつてゐるのだ。この大産業地帯に據つて戦ふ時、われ等は斷じて、ドイツのやうな慘めなものではないのである。

血は腐らぬ

そして、わが軍隊は、しづかに正義の劍をさゝけて、この大地域を守つてゐるのである。この陸軍と、この海軍と、ともに極東平和の「守り神」である。

この「守り神」が弱ければ東洋の曠野には「山賊」や「野獸」がはびこり、太平洋の波は「海賊」や「海魔」に汚されるのだ。

われ等は、どんなことがあつても、東亞を守る重任は果さねばならぬ。

日本は、今や、ほんたうに、「大日本帝國」としての、第一歩を踏み出したのだ。

われ等は、驕らず、怒らず、又、悲しまず、憂へず、堂々と行進するのだ。

日本民族には、永遠に若い血がみなぎつてゐる。この血は斷じて腐らない。血の腐敗しない民族は戦を怖れない。

しかし、又、われ等は決してドイツ流の侵略主義ではないのだ。血を見てよろこぶ惨忍さは、日本民族の知らぬところである。

わが軍隊は、あくまでも皇軍である。

陛下の軍隊である。

軍旗はみだりに兵營を出ぬ。戦艦の檣には、みだりに戦鬪旗はかゝげられぬのだ。

われ等が戦ふのは、たゞ東洋の平和を守るための、正義の戦だけである。

東に黒潮、西に蒙古の平原。この二つの陣を犯さうとする者があれば、日本ははじめて秋水を抜い

て起つのだ。

しかし、宣戦の大権は畏くも陛下に属す。われ等はつゝしんで、たゞ「大君の邊にこそ死なぬ。」と詠つた、祖先の武士の魂を、「断じて失つてならぬ。」と、心を決すればよいのである。

義勇を忘れて日本はない。義勇の精神を失つた者は日本人ではない。

この書は、日本人に捧げる軍書である。

日本に生れ、日本に生き、日本に死することを、絶大の誇とする諸君に、心から捧げる昭和の軍書である。

われ等若し戦はば終

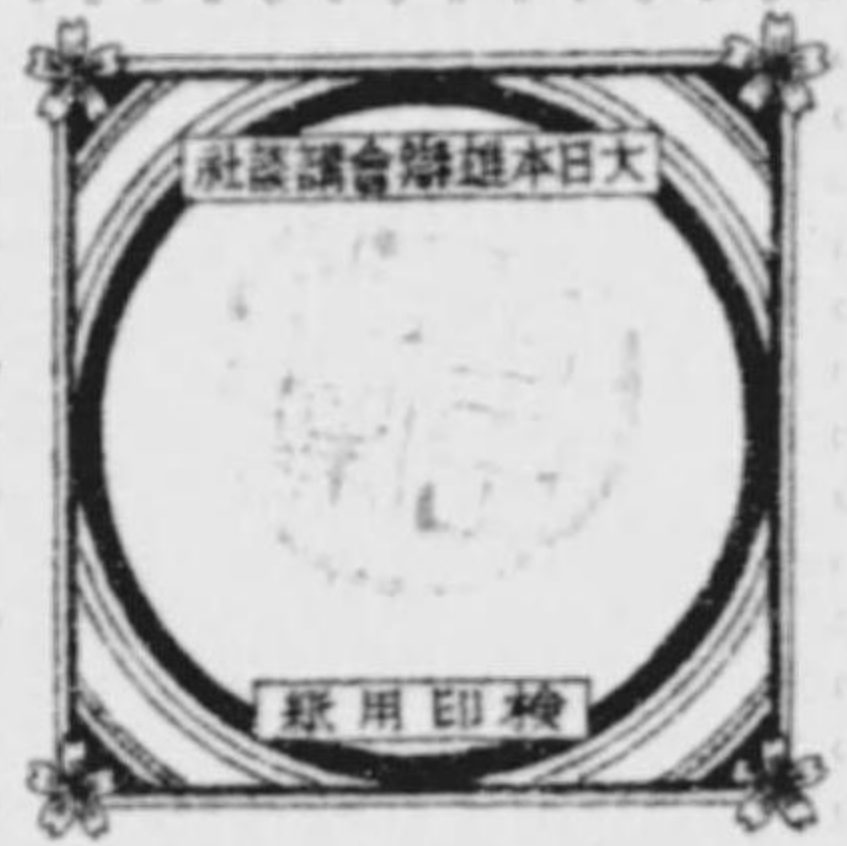
(「われ等若し戦はば」奥付)

昭和八年八月十八日印
昭和八年八月二十五日發行

定價 壹圓五拾錢

有共者行發者著は權作書本

製複許不



著者	平田晋策
發行者	野間清治
印刷者	和田助一
印刷所	東京市芝區金杉新濱町十二番地 單式印刷株式會社

所本製泉小

發行所 東京市本郷區駒込坂下町四八

大日本雄辯會講談社

振替口座 東京三九三〇番
小石川電話 (85) 8080-8084

平田晋策先生著—寫眞三百餘枚、本文全部オフセット印刷、他に色刷多數

われ等の陸海軍

定價 一圓三十錢
送料 十錢
裝幀・布裝・美麗紙
裝幀・松添健先生



世界に誇れ、われ等の軍隊！ 強い兵隊、凄い武器
日本は今大切な時、一人残らず之を讀め！ 日本力の知れ
日本の軍隊を恐れない國は世界にない。軍艦でも大砲でも飛行機でも、今ではみんな日本の技師の手で作られるのだ。しかもそれが素晴らしい武器だ。それをもつて戦ふ日本の兵隊は、また忠勇無比の兵隊である。併し今は決して油断できない時だ。米國やロシアを始め世界各國も準備をしてゐるではないか。もしも戦争が始つたら、日本の軍隊はどんな組織で、どんな武器をもつて、どんな風に戦ふか。今の日本はどれくらい強いのか。その外、日本の國民としてゼヒ知つておかなければならない大切なことを、面白く痛快に分りやすく書いたのがこの本です。この本を讀むと、日本の國がしみんと有難くなり、愛國の熱血が湧いて来る。
陸海軍兩大臣を始め諸將軍諸名士みな激賞！ 國民必讀の名著

武俠熱血!! 山中峯太郎先生の大快著!

亞細亞の曙

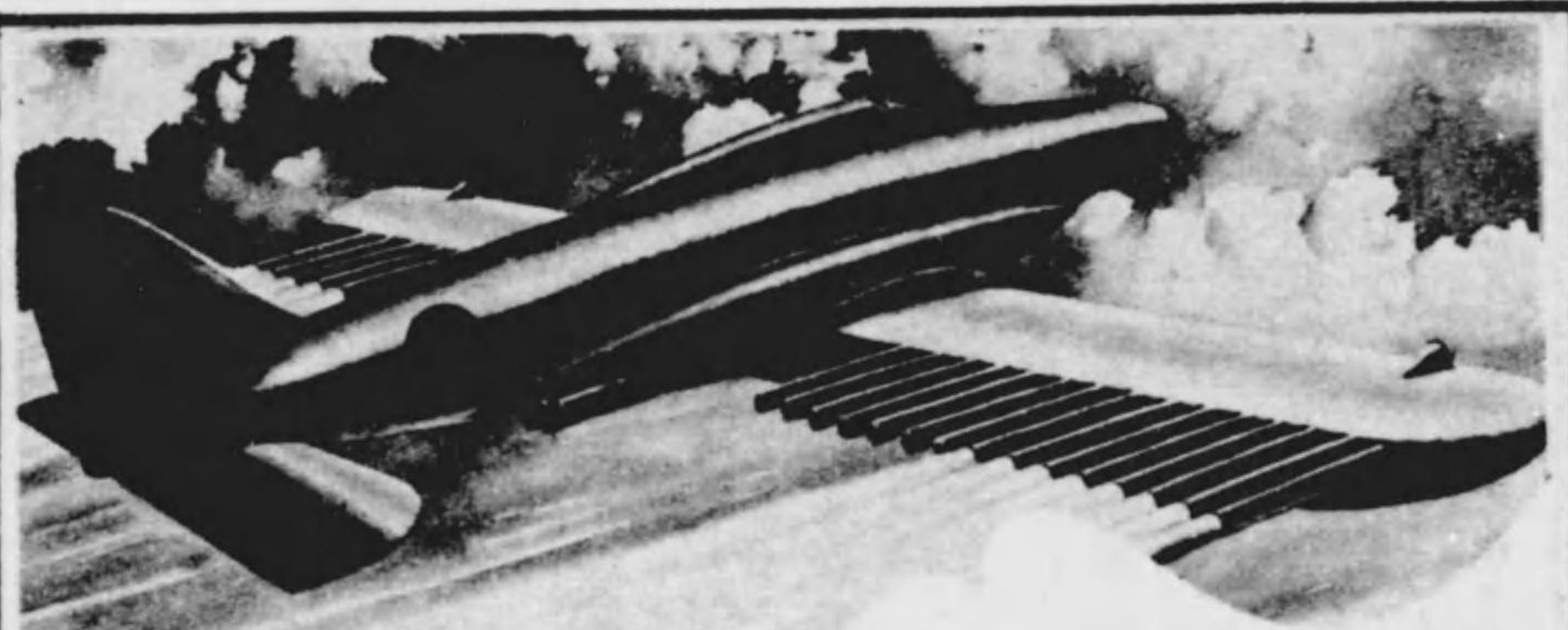
定價 一圓三十錢
送料 十錢
權島勝一先生裝幀・挿繪
四六判・布裝・函入

何といふ痛快さ!! 何といふ大冒険!!

つきくりに起つて来る大事件! 日本の危機! 世界を脅かす恐怖の怪談! 魔窟城の破壊! 深夜の空中大激戦! 思はず手に汗握る冒険また冒険! 活躍また大活躍! はじめから終りまで、痛快な場面、壯烈な場面がつといて、胸がどきどきします。

憎むべし!! 〇國の大陰謀!!

日本征服を企てつゝあつた憎むべき〇國! 名高い科擧者や技師を大勢集め、毒ガス、怪力光線、その他色々の物凄い最新式の兵器を秘密に發明し、製造して、隙あらば日本に征めかけようとしてゐたのです。この時上海に在つたわが本郷義昭少佐は、危くもこれを發見し、奮然として敵の根據地に乗り込みました。
あゝその目醒しい活躍! 日本の少年少女なら、どうしても讀ますにゐられない!



日露戦争の時勇敢なる日本軍人はこんな大冒険をやつた。

てきさちうわうだんさんびやくり

敵中横断三百里

陸軍大将 白川義則閣下大激賞の名著

勇ましい我が騎兵斥候の死生物語

日本が勝つか負けるかといふ大切な「沙河の戦ひ」の時に、重大な任務を負ひて敵軍の中に忍び込み、三週間の間、縦横無盡に活躍して、全軍感動の大武功を立てた、あの有名な騎兵中尉（現参謀本部の總川將軍）以下六勇士の大冒険を書いたのがこの本です。或時は馬賊に襲はれ、或時は敵軍にかこまれ悪戦に悪戦、苦闘に苦闘を重ねること幾十回、大膽不敵の勇ましい働きは、手に汗握り、胸をどらせずには読めません。あゝ敵中横断三百里の大冒険！

日本魂の血は躍る！ 忠勇無双の六勇士！

そのほかに痛快壮烈な戦争の話が幾つもあります。

どれを読んでも面白く勇ましい。日本人としてぜひ知っておきたいことです。



山中峯太郎先生著
樺島勝一先生装幀並に挿繪
四六判・布装・函入
定價一圓三十錢送料十二錢

一等飛行士 熊川良太郎先生著 樺島勝一先生装幀、函入、地圖二十枚、色刷り折込 定價一圓三十錢（送料四錢）

征空一萬二千方

全世界驚嘆 日本青年の大冒険飛行記！

見よ！ 痛快、壯絶なる歐亞の天空の征服

もえるやうな元気で、狩田飛行機を出発した、熊川先生がいく度か危険を冒し、ついに、ロシア、ドイツ、フランス、英國、イタリアの空を征服して、ローマに凱歌をあげるまでの血の出るやうな苦心の飛行記、しかも、歐洲各地の珍しい風景、外國人の親切な話、愉快な思ひ出等がつぎつぎに出て来ていよいよ面白い又附録「飛行機に乗る諸君のために」は、飛行機について諸君の知りたいことがどつさりあります。

さながら愛機にのつて、歐亞の空を飛ぶやうに愉快です！

どこでも非常な大賣行です、ぜひご覧下さい！



少年聯盟

佐藤 紅緑先生著 定價 八十錢 送料 十錢
日本少年の富士男をはじめ世界の國々を代表する十五人の少年が少年聯盟を組織して共同生活を営む世界的大作！

吼える密林

南 洋一郎先生著 定價 八十錢 送料 十錢
アフリカやボルネオ島やマレイ半島の密林原野に、ライオン、豹、虎、犀、ゴリラなどを次々に征服する大探検物語

萬國の王城

山中 幸太郎先生著 定價 九十錢 送料 十二錢
大蒙古王國の獨立を計る熱血の蒙古青年を援け、をしくも大活躍をする日本將校日本少女の血わき肉躍る痛快物語

陸奥の嵐

千葉 省三先生著 定價 八十錢 送料 十錢
朝廷の密使となつてかよひ美少女を道づれに、恐しい敵地へ旅だつた禁軍の騎士武蔵の活躍には思はず手に汗握る

村の少年團

佐々木 邦先生著 定價 九十錢 送料 十二錢
町の少年團をまねて作つた日出村の少年團の痛快な活躍。笑ひながらいろいろよいことを覚える天下一品の快小説！

全權先生

佐々木 邦先生著 定價 八十錢 送料 十錢
全權先生のあるところ、必ずあこがれはつて珍事件大騒動の傑出で、親子ごとく描つて天手古舞ひ面白いく

苦心の學友

佐々木 邦先生著 定價 一圓三十錢 送料 十二錢
いたづら好きの關家様、利口な正三君、げんかくな安齋先生、やさしい妙子姉様のとても滑稽でおもしろい諸講小説

日本人オイン

大佛 次郎先生著 定價 一圓三十錢 送料 十四錢
オインは、英傑山田長政の子です。父に劣らぬ痛快な日本男子の父のころさしを受けつぎ、シャムの國で大活躍！

一直線

佐藤 紅緑先生著 定價 一圓三十錢 送料 十二錢
給仕となつてはたらく熱情の少年島本とくづ屋となつてはたらく英太の物語。勇氣と至誠と快活を教へ熱血を湧かす

少年讚歌

佐藤 紅緑先生著 定價 一圓五十錢 送料 十四錢
淺岡亨二は偉い少年だ、日本少年の活きた手本だ。どんな困難困苦にあつても負けずにふんれい努力し遂に成功する

あゝ玉杯に花うけて

佐藤 紅緑先生著 定價 一圓五十錢 送料 十二錢
「今に見ろ偉くならすにおくものか」とまづしい家に生れた千三があつれば一高の秀才とうたはれるまでの奮闘物語

紅顔美談

佐藤 紅緑先生著 定價 一圓二十錢 送料 十錢
人さらひにさらはれて樺太の監獄部屋にこき使はれてゐる親友をすくはると苦心さんたんする三少年の厚い友情物語

龍 神 丸

高垣 晴先生著 定價一圓三十錢 送料十二錢
舟は小さくとも龍つ玉は大きいぞと聲高くと勇しく海に
陸に痛快な大活躍をする少年龍太郎のスパラシイ腕の牙え

豹 の 眼

高垣 晴先生著 定價一圓六十錢 送料十錢
弱い士人をたすけて再びアメリカに大インカ帝國を建設し
ようと奮然起つた快少年黒田が悪黨のアメリカ人と大争闘

涙 の 握 手

水守龜之助先生著 定價一圓四十錢 送料十錢
花實に身をやつして敵城に忍びこみ父の仇を討たうと苦心
する王子チガープと美しい敵國の王女サンター姫との物語

ハーマニカ奏法

宮田 東峰先生著 定價一圓二十錢 送料八錢
どうしたらハーマニカが上手に吹けるか。その吹き方のい
ろ／＼を手をとつて導くやうに親切に、いねいに教へた本

少年 戦 線

大倉 桃郎先生著 定價一圓三十錢 送料八錢
英一君は貧しい爲に友達や叔父に苦しめられながらも、苦
闘する友を慰め勵ましなから一生懸命に勉強して偉くなる

曉 の 歌

大倉 桃郎先生著 定價一圓三十錢 送料十錢
父をうしなつてから上京した新吉が母に孝行をつくしなが
ら血のでるやうな奮闘をつとけて苦學し成功する立志物語

輝 く 凱 旋 像

池田 宣政先生著 定價一圓三十錢 送料十二錢
名高い「形見の萬年筆」「輝く凱旋像」「ちんどん屋の子」
『空の肉弾』等々集むる二十四篇ことごとく珠玉の名篇話

リンカーン 物語

池田 宣政先生著 定價一圓三十錢 送料十二錢
貧しい樵夫の子から米國大統領にまで出世し、あはれな四
百萬の奴隷を解放した有名なリンカーンの感涙の名篇記。

少年 プリニターク 英雄 傳

轟田 龍先生著 定價一圓五十錢 送料十四錢
ギリシヤ、ローマの大英雄や大偉人の感涙に満ちた傳記。
ナポレオンはじめ世界の偉人は大抵これを讀んで奮起した

發 明 美 談

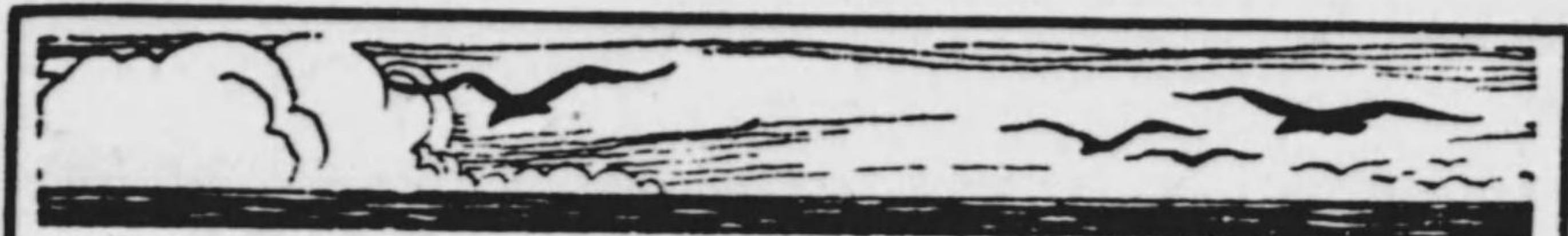
楠木 卯馬先生著 定價一圓三十錢 送料十錢
ラヂオや飛行機や汽車や蓄音器などを發明した偉い人々の
苦心談を書いた本で色々なことが覺えられ智慧がきます

少年 模 範 文

八波 則吉先生著 定價八十錢 送料十錢
小學校の國定國語讀本をつくられた八波先生の文章の作り
方のお話と日本全國の少年から募集した模範文例が五百餘

少 年 詩 集

西條 八十先生著 定價一圓五十錢 送料十錢
はじめ詩を讀む人にも詩の面白さがよくわかり、思はず
聲をあげて歌ひたくなるやうな美しい美しい珠玉の名詩集



のらくろ上等兵

漫 畫 常 設 館

漫 畫 の 罐 詰

漫 畫 の お 祭

團 子 串 助 漫 遊 記

輕 飛 輕 助

田河 水泡先生著 定價一圓 送料八錢

どこへ行つても引っぱり麻の大人氣、猛天隊の兵隊さん

のらくろが、二等兵から伍長になるまでの痛快な漫遊物語

田河 水泡先生著 定價一圓三十錢 送料十錢

變りもかほつた珍名優連がわれこそ天下第一とお得意のこ

つけない大活躍。おもしろい。全部オフセット二色刷り

田河 水泡先生著 定價一圓二十錢 送料十錢

面白くて愉快なこと天下第一得意の名漫畫が千以上もあ

つて見れば見るほどをかしくて笑ひ出すにはあられない

田河 水泡先生著 定價一圓三十錢 送料十錢

出て来るくすバラシク愉快な漫畫がぞろ／＼、ワッショ

イ／＼とつきからつきへと大賑はひ。色刷りステキな二本

田河 水泡先生著 定價一圓三十錢 送料八錢

少年豪傑串助が、かつば征伐、げけもの退治、天狗と大試

合をするなど、江戸から長崎までのとても痛快な武者修行

田河 水泡先生著 定價一圓三十錢 送料八錢

からだは小さくても非常に強くて身軽な輕助がびよん／＼

すい／＼と世界漫遊に出かけて大てがら。とても面白い。

12000

27
144

11 11

